

川柳塔

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年二月二十五日 印刷
昭和四十二年三月一日発行 (毎月一日発行)
(第一八号)



No. 18

特集・女流作家はいつ作句するか

三月号



清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



超特撰 (化粧ケース入)
「ハリツトル詰」・一・二・三・〇〇円



えらばれ
みがきぬかれた
灘の酒

超特撰
日本盛

橘 高 薫 風 著

麻 生 路 郎 著

檸檬 (れもん)

★ 新 川 柳 鑑 賞 ★

送料共 500円

定価 250円・送料 120円



のむだけで…痔がしぼむ！

240
サ-カネツテン



● 新しい痔の内服薬

サ-カネツテン

★本剤の説明書御希望の方は下記へ



日本新薬株式会社 京都市南区西大路八条

三振したくないから酒を断ったのさ
 酒のない暮らしに馴れて古稀の春
 おっしゃる通りとはまのぬけたものほしさ
 縋がる眼に小さな嘘が怯えてる
 五百羅漢やすらぎの眼が死を讃え

今月のことば

◎知識や学問が深いことは寔に尊いものである。しかし今日のように世相も学問も複雑になってくると、少々の頭脳では整理がつかぬ事になる。それをいい事にしても言えは唇寒しと無口でごまかす、にやにや型もある。「賢い人間はいろんなことを知っている。如才のない人間はいろんなひとを知っている」と言うた人がある。面白い言葉だと思った。

◎「大昔書物も先生もなかった時代のエライ人は自然を先生として学問をしてきた。書物がなくとも先生がなくとも学問は出来る。そ

の証拠に七千年前にエジプトの国民の中には現在の日本の大学生よりも遙かに天文学に深い人があった。今日のような暦はなく空の星の動きを観察するより外はなかったからである」と上野陽一氏は言う。面白い言葉だと思った。

◎先日の毎日に中西悟堂氏の談話がのっていた。

「どうも今の世の中は知らなくてよいことが多すぎる。私は自分の勉強ばかりしていればそれでいい。映画は十年に一度みる」面白い言葉だと思った。

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖

.....

中島生々庵.....(1)

川柳塔

.....(同人作品)

中島生々庵選.....(4)

★女流作家はいつ作句するか

.....(同人特集)

.....(22)

西出 一栄・山川 阿茶・中島 小石・天正 千梢・楠田 英子・寺田 花宵・三井 酔夢
丸川 初甫・内藤きさ子・久米奈良子・高橋 操子・宮尾あいき・岩田 みよ (到着順)

いのちある句

.....

戸田古方.....(42)

織田信長

.....(川柳戦国志・八)

富士野鞍馬.....(40)

秀句鑑賞

.....(前月号から)

後藤梅志.....(20)

川柳初篇研究

.....(四十五)

.....(18)

前田喜代人・岡崎重義・清 博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸 十府・岡田 甫・

烈士の勲章

.....(大陸放浪)

東野大八.....(30)

沖縄で思う……………服部十九平……………(29)

私のメモから……………吉田水車……………(41)

漢字の間違い……………藤原秋月……………(54)

雅号ぶつちやけばなし……………三井酔夢……………(28)

おまわりさんの句集……………山田季賛……………(43)

近作柳樽……………西尾栞選……………(32)

春は大萬川柳から……………十五周年記念大会……………(48)

大萬川柳「長靴」……………入選発表……………清水白柳選……………(50)

初步教室……………菊沢小松園……………(44)

★柳界展望……………(薫風)……………(52)

★本社二月句会……………(庸佑)……………(55)

★各地柳壇……………(文秋)……………(59)

「良心」……………池田古心選……………(46)

一路集「メンバー」……………福田丁路選……………(46)

「空港」……………黒川紫香選……………(47)

★編集後記……………白柳一三夫……………(64)



中島生々庵選

新居浜市 安藤桂仙

拝み屋のようにシエーカー振りまくり
開きにくい板戸は足にけとばされ
左官屋の手抜きを大工言いに来る
長生きをしてねと恩給あてにされ
冗談へむきになるのが親しまれ
鞘当てのように衣裳を替えて来る

宝塚市 黒川紫香

ニツコリと笑い過去にはふれさせず
風を背にして病妻をいたわる気
コチコチになつて社長室から出
湖のどつかでポトンと冬の音
きつちりと定期を出せば見てくれず

大阪市 正本水客

ともかくも突き当るまでやる心算り
ゆつくりと歩いて自分を慰める
不用意な言葉しつこく覚えてい
みの虫を見付けた空は冬のもの
冬の太陽を見失うこと久しき日

岡山県 浜田久米雄

折り合いの悪い人柄無口にし
お天気の前報へ農家身構える
貯金出す日は神妙な顔で待ち
この音を聞くとゼット機影がなし
じいちゃんとお風呂は早くすみ

下関市 中村九呂平

真実が勝つと信じていた涙
拳骨で鼻突き上げた酒の味

最良の足どり美容院を出る
善行が汚職の記事にせばめられ

大阪市 市場 没食子

年寄に仕事があつて羨まれ

セールスがノルマに喘ぐ十二月

黒い血が売春法をあざわらい

金儲け下手でも控えに妻が居る

高槻市 若柳 潮花

さしかけた傘は花道行くように

餅花の影をすくうた舞い扇

御ひいきへ新春^{ハル}口上の手をつかえ

ひとり旅ひとりつきの湯の香り

児島市 本田 恵二朗

老梅の古淡な風情を母に見る

チャンネルで漫画さがして孫の守り

ハンドルを下戸に持たせた帰り道

青写真で終らば終れ夢を追う

大阪市 橘 高薫 風

飾り窓顔の映るを見て離れ

牡丹雪昔にこんな夜があつた

日本ラインに蛙・猫・ライオン岩あり

淋しい岩がある 動物の名を付けられて

何もかもぬかるむ戦後明治村

岡山市 服部 十九平

宮大工電気鉋と妥協せず

堂々の論陣速記も肩を張り

雪の夜の孤独が酒の粕を焼く

白紙一任したのに裏でまだ動き

岸和田市 内藤 ささ子

屋酒のにおいへ合づちうつておき

迎春へここはレンコン掘る寒さ

今朝読んだ記事をだまつてきいてやり

子供等は妙な遊びを探し出し

大阪市 後藤 梅志

知らぬ間に夜明の早い寒の入り

朝々のかしわで神にとどく音

明治回顧二句

千束町いと安々と春の夢

軍隊でおぼえ藤八拳つよし

大阪市 山川 阿茶

爪弾きを犬にきかせて一人ぼち

水風呂も昼寝もかかさぬ正月

ホテルへ折れるアベツクを二階から

墓詣り叱つてくれぬ石となり

岡山県 直原七面山

黙して語らぬみ仏の慈悲

心中話へ降りしきる雨

腹割つて見せたいなどと娘を口説き

農村の平和を奏す吊し柿

高槻市 傍島静馬

温泉で消耗帰つてあんまする

マダムきよう地味につくつて借りに行き

女房が何んじやと思うほどに酔い

音痴ついに唄を奇術に切り換える

倉敷市 木村千容

としがいもなく元旦を酔いつぶれ

嘘もまぜ報告振りは名調子

福耳といわれ声なき声もきき

こだわりもなく有り難ういえるなり

香川県 三井酔夢

祖母を恋う

祖母ひとりおいて燃やした恋終る

あの世から守つてやると昇天し

高校生試せまる

神たのむ母に自信の程をみせ

大詰めも近いいらだつ母となり

新居浜市 小林孝正

君がそれで倅せならばと云う別れ

息子ほどの課長にお中元が要り

やつと借りて帰れば家族皆テレビ

栗のイガ栗も己を守る術

京都国際会館見学三句

ノーベル賞の坐つた椅子にかけてみる

通行止めこれから先は顔がいり

宝ヶ池の蛙英語で鳴きかわし

うたたねのネジ鉢巻は受験の子

倉吉市 奥谷弘朗

出直しが出戻りとなる選挙戦

全集を揃え心のあたたかみ

良き夫たらむ五十へ策を練り

女房と五目ならべてすこす夜

玉野市 小谷仙山

汗だけが本物だった怖い夢

其の気持ちうれいと言う涙声

子供叱りすぎて妻に居直られ

風邪引けば私が困ると妻が着せ

岡山県 藤原秋月

天文台だけが見ている冬の星

腹心を揃えて多数決で決め

追伸の方へぎようさん書いてあり

番犬が粗食へストもせず吠え

兵庫縣 遠山可住

交通事故わが系累の中まで来

孫に嫌われにんにくをよう喰わず

叱りかた習ろたところから子を叱り

成績の良いポリさんで手きびしい

愛媛縣 村上旭童

謹賀新年長男ももう帰らぬ氣

一日中の話題を女もち合せ

山の木を売るより外に策がなし

寒い道又自家用に追越され

富田林市 川端東雲楼

甲斐性もないのに養子いやという

栄転も公害の街蒲柳の身

大安であつた暦のにくらしく

吹き終えて一札虚無僧の美貌

ハワイ 築山快夢起

落選のビラ町角にそのまんま

栄転か左遷か奥様氣がもめる

醜男の取柄は金を貯めて居り

スキヤンダル記事となるまで紳士顔

大阪府 不二田一三夫

鯛焼きの出世は箱につめられる

自分だけ助かる願い手を合わせ

借金のスリルないまま大みそか

初もうで時差参拝で事故にあい

岸和田市 高橋操子

ばあちゃんが一番好きと孫の智慧

草木染小紋のよさも四十越し

髪染めてやつと気分を取り戻し

下関市 国弘半休

日の丸に想う

日の丸の旗の売り場を尋ねられ

日の丸の旗よりアンテナ高く立ち

選挙粛正

百万一心自粛し給え雪の中

大阪府 大坂形水

晩年はここで落ちつく設計図

沢庵の漬り加減はうちのもの

商売と別の話しに喫茶へ来

門真市 福島鉄児

稀に見る肌やと医者のおえらく

もう何年生きるやろかと指を折り
お迎えが来そうで病院通いなり

京都市 大鶴喜由

若い氣を痛さだるさで年寄せ
土をめくれば萌え出する芽の鋭くて
風寒くわが影長く夕映える

豊中市 戸田古方

初風呂のタオルはさらにかえてある
寝正月神経痛が腰にくる
朝酒があるのに盗み酒をする

鳥取市 河村日満

子の票をねらう賀状が子へとき
うれしさいつばい成人の子へ酌をする
金貸してからの無沙汰を腹にもち

尼崎市 長谷川三司

いい勉強になつたと家裁から帰り
満員へ割り込んで見てフト淋し
朝寒し雀が降りて来た落葉

大阪市 吾郷玲人

明治村ふと幻想の中に居る
まごころがやつと通じた日の日記
月々に夢積立ててマイホーム

熊本県 有働芳仙
賞品へ俺も釣られて行く一人

三等分リンゴの気持はよく分る
元旦は炬燵へあごをのせて暮れ

加賀市 那谷光郎

小錢だけ別の財布に神社巡り
お屋敷に隠居も春蒔く種子を吊り
悪友の祝儀は裸錢でくれ

愛媛県 渡辺曉童

みかん豊作

不言うなとみかん色づく
相容れぬ色は螢光灯の下
取れすぎたみかんは安い愚痴となり

今治市 越智一水

まつすぐな道旅人はさみし過ぎ
男ひとりさんまを焼けば歌となり
まつくらな夜へとび出す反抗期

大阪市 本多柳志

数の子のない倅せをかみしめる
生きのびた幸をよせ合う年賀状
平和とは良し日本の初島田

藤井寺市 西いわを

にんにくを嚙つて身体整える

借着して背の高さを話合い

養老院夫婦の部屋の金魚鉢

竹原市 杉原愛鳩

病人の気が済む葉替えてみる

いたわしや彩色された野の仏

謹厳に女の脚をぬすみ見る

岡山市 江国幽谷

三人がマツチ三本摺つて喫い

よく法規知つていまして衝突し

枯枝と思つて折れば生きており

岡山県 田村藤波

点滴の雪に観念力目をつむり

強盗をする格好で出る寒さ

またやつたなとサイレンを寒くさく

笠岡市 木山遠二

還暦の妻かしずかせ古稀の春

つれづれの内職子等がよろこばず

蛇口から出た若水もめでたけれ

大阪市 中島小石

羅漢寺の落葉ふみつつ老夫婦

羅漢さんどこやら誰かに似てる顔

また一葉おちて寒々喪服着る

高石市 谷沢好祐

怪獣が玩具売場に勢揃い

大晦日パパとボクとは追い出され

嬉しさは美人に欠伸うつされる

岡山県 池田古心

スピードの遅さが街で叱られた

無茶苦茶に女にされて好きになり

御利益を一人占めする程祈り

大阪市 水谷竹莊

バナナ買うにも数をよむ子沢山

ストープにあたりヌードは出番待ち

せかれても女塗るだけ塗つてから

京都市 都倉求女

騒音も次第に埋めて夜の雪

正月の中心気圧 晴着の娘

市電もう音せず夜なべも切り上げる

京都市 松川杜的

しあわせは金銀閣に降る小雪

飛行機雲天への高さを未だ消えず

小倉山の水だとお茶を褒めちぎり

奈良県 木村十悟

聞き分けて呉れる一人の子も交り
かん袋みたいな妻と五十年
三カ日スラムは宿銭滞り

芦屋市 丸川 初甫

妻の愚痴夕刊へ聞き流し

京の顔見世「寺小屋」

双眼鏡首実検の眼を見つめ

京の顔見世「佐々木高綱」

高綱の愛馬の足に見る年季

明石市 家沢 薺花

馬鹿をみた悔いも所詮はたどる道

また一つ年寄大事に年を取り

食べてチョン人間様も自動巻

大阪市 西出 栄

孫に買う羽子板そつと抱いてみる

白い障子へ小さい忍者のかげうつり

運勢はこよみ通りについて来ず

神戸市 仲 どんたく

老夫婦手を振り合うて朝の駅

ちつちやなちつちやなちつちやな孫の靴

煩惱即生甲斐と夜の灯へ

豊中市 寺田 花宵

風邪引いてコロツと商売気離れ
侮られまいとマダムのゼスチュア
出掛けると覚りスピツツそつば向き

大阪市 石倉 旅風

遺影のこと

あの時に掲げる写真を撮らせる気

曰く言い難いところを野暮に訊き

寝不足の顔が戸惑う朝の雪

竹原市 山内 静水

神妙に小言聞いてる二日酔

変人にされてしまつてから気楽

問題は張本人が謝らず

大阪市 金井 文秋

肺癌へ挑戦だよと煙草喫う

手料理を無口がほめたのでうれし

割勘にしとこ何時また逢えるやら

松江市 小林 孤呂二

さくらテングス病駆除

桜きる馬鹿と見ている人もあり

元旦の突い今年はこれで行こ

餓えたよな顔にもあわず松の内

大阪市 児島 与呂志

端株持ち自民党をばほめ歩き
この辺でほしい氏神出てくれず

市電廃止

業務命令結局モグラの形つけ

美禰市 安平次弘道

工場街雪もスモッグがにおい
急患へ屠蘇を詫びてる聴診器

厄年の試練不渡つかまされ

宝塚市 小島無聖

襟もとの縞が丸顔ひきたたせ

朝の茶をすすめるひとの居ぬ火鉢

ぶつちやけてみればと嘘のあつたこと

京都市 室井八九寸

その純な気をワンマンと陰の声

振袖もエイツと投げるお賽銭

松の内過ぎたを元旦として返し

大阪市 今西章雅

別れますとキツパリ言い切る程に冷え
贈りものの服地仕立はただでない

オブラートに包んでのどに引つかかり

大阪市 河井庸佑

言いたいこと言える身分を羨まれ

人に貸すノートは別にする時世
友情でノートを貸しておいぬかれ

新居浜市 近藤凡生

たそがれて尼僧の影も人臭し

水を得し魚住むべきとこに住み

振り向けば振り向く影を振り切らん

大阪市 中川滋雀

叱られて居るのを覗き叱られる

こんど買う嘘を子供に教えこみ

おはなはん済めば姑と線を引き

出雲市 中川晃男

母さんが大好き恋を知るまでは

千代紙の小箱乙女の日秘密

触角の届く範囲で虫生きる

鳥取県 渡辺乱坊

欠勤の理由家族の智恵も借り

つとめ多忙

八日目に晴れて夫婦のお正月

屠蘇気焔政府をコテパンに叩きをり

岡山県 浜野奇童

雪ダルマけさ門衛の型で立ち

子は寝息そこからあすにする童話

空想を先生だけが聞いてくれ

北支より帰還して二十年

芦屋市 松下 たつみ

人柄を敵も味方も利用にき

大陸で鍛えた足もしびれかけ
中古車を買つて離農を引き止める

住んで居る人あり山に灯がともし

ハワイ 羽佐間 柳葉

二日酔我が子に見せる顔でなし

奈良県 草 深 醉 升

地下室で蠅は悠々年を越し

希望などおますかいなとチンドン屋
真相が分つた頃は世も変り
感情の動物だから世辞が好き

庭の木へ一家総出で雪の朝

泉大津市 高 津 徹 也

物言えば損をするよな顔が増え

尼崎市 岡 本 昭 三

メンバーの中に妊婦服もいる

蜜蜂をそつとしておく豊かな日
嘔りを快しとしふき掃除
秋霜へ新調の靴 靴の音

守口市 村 田 瓢 太

ふところ手女将にたくらむ事がある

倉敷市 水 紛 千 翁

かしわ手が今年へ届く初詣で

雨の元日いと静かなり寝るとする
初詣で乗り換えず行けるとこに決め
孫二人来て寝正月フイにされ

雑音に片隅があり二人居る

大阪府 天 正 千 梢

笠岡市 木 山 要 次

解けるなよ貧富隠してくれた雪

かん椿秋からつばみかたく持ち
暖房へ水仙苦しそうに咲き
爪切つてとあまえる程に妻も癒え

暗号で書いた日誌の過去おかし

大阪府 川 口 弘 生

白と黒はつきりしたく嫌われる

鳥取県 森 田 布 堂

お地蔵の頭でカラス口を拭き

お返事の分はくだけで書く賀状
御好意を素直にお受けするも歳

原爆をチラチラさせている平和

鳥取市

藤本 礎山

ライバルを主幹と決めて日々はげみ

平田市

久家代仕男

頼りないお人やなあと頼られる

風呂場から俵の唄も久しぶり

外国の子守唄でも兄は眠り

御祝儀が出そうで三味を締め直し

出雲市

原 独仙

交際に格差をつけて女着る

スタートの遅れに焦る贈物

倉敷市

野田素身郎

年明けて見ても世間のせち辛く

寒い朝目覚まし無情に時を告げ

齢なんか聞かず酌がせて頂戴な

名古屋市

吉田 水車

松江市

柳 楽鶴丸

くそ度胸持つて生れたのが不運

あるだけの旗なびかせて大漁船

御題「魚」

倦怠期男のエゴイストを知り

年々に誓う心も疲れかけ

赤字赤字世間はそうと見てくれず

下関市

桜川 不水

和歌山市

土谷 城石

年玉で孫に一日もてただけ

獅子鼻へ伺い立てる課長補佐

祝儀花予算に入れてパー開き

河豚殿へ美妓と銚子が従いて来る

神戸 凡九郎

勝力士祝儀ごつそり一握り

ワンセットのように今度も立候補

和歌山市

西尾 公作

いつか止む日記に墨で書き初めす

出来そうもない公約と聞いておく

岡山市

横山 一声

初孫が笑ったと年玉ふんばつし

成人式選挙の事より飲む話

魚屋の台の高さに小銭筈

晴着着た娘は亡妻に生き写し

島根県

藤井 明朗

東大阪市

久米 奈良子

流木の海の広さがわかりかけ
まないたの唄もはずんで妻若く

小松市 関戸宗太郎

投げてころがして荷主が不在
磨く価値ない石もあり土産店

鳥取市 森本法泉水

妻の入院六年目に入る

検温に元旦もなし暮れもなし

浅津温泉にて

朝飯がすむと旅館は他人めき

兵庫県 河原みるる

お気楽にみてくれるならそれもよし

衆議院解散の日に

新聞へハツ当りする憎悪感

伊丹市 小川静観堂

身体髪膚ウールマークの羊かな

この頃はツンボ機敷が性に合い

大阪市 福井野迷路

反共の全学連とは珍しい

黒めがね四流国の大統領

堺市 高崎雄声

欠伸のうつる研究とかで博士号

言いたい事言える昭和が味気なし

呉市 林野甦光

徳利へ下戸は栓したままの春
やばに意地張つてゲテ物食べて見せ

奈良市 宮口笛生

裕福じゃないがボーナス出たゆとり

正月の雨へテレビが酷使され

江南市 伊丹阿喜良

単身赴任家族と別居

お帰りと云う声のないドアを開け

ラーメンも食いあき別居まだ続き

高槻市 山田季賛

志賀高原

頂上で湖を賞め風に合い

ハイヒールで又来て下さいとバスガール

大阪市 宮尾あいき

迷い札付けて賀状が六日に来

お年玉予算を満たす義兄を待ち

富田林市 浅川八郎

南大阪忘年川柳会の皆々様に

寄せ書きへ朝な夕なの瞳を濡らし

気休めを聞き度くないと聞いて居り

枚方市 宮川珠笑

家計簿がまだしめられず除夜の鐘

仲裁も一緒にパトカー乗せて行き

姫路市 隠岐不酔

ボーナスが妻をおこらす種をまき

子沢山オイと呼ぶ子が一人おり

大阪市 福井多蘭子

お茶だけはこちらでと庭を見せ

人の世を物で動かすから憎い

守口市 羽原静歩

お扇子のように札びら数えられ

二枚目でしたと昔を話しかけ

宇都市 平田実男

一票が欲しい賀状の白々し

屠殺場が待つとは知らず豚は食べ

一松江市 岡崎祥月

黒い霧洗う政治の裏表

ありつたけの力雪路をベタル踏む

大阪市 室谷鉄舟

新春

かがり火の闇の深さに神おわす

寒波襲来

かじかんで小さな切符ままならず

八代市 永松道雄

顔一つばい師走の皺をかきあつめ

何事も無口な嫁で放つとけず

和歌山市 二越春爾

子等の床藻抜けのままだ寝正月

運転士のどから手の出る屠蘇出され

普通寺市 岡田拳法

票になるならば泥手とても握手

トンネルをいくつ抜けたら広い道

岸和田市 葛城伊三郎

総選挙魔性仏心乱れ飛ぶ

胸高の帯までがよしそと輪なり

泉佐野市 大工睦夫

衣食住がやつとの貧乏長生きし

帰り路軍歌唸つて夜警番

和歌山市 野村太茂津

初春や一念発起繰り返し

開けて行く宇宙唯「静」を祈る

富田林市 岩田美代

だます気とだまされる気がここまで来

正体を意外な所で見たシヨック

年暮れ賑いよそに社会鍋
娘に晴着させて母親の寝正月
大阪市 西川 誓二

笠岡市 松本 忠三

読経の済むまで単待機する

「君が代」を一回ですと注意され

熊本市 楠田 英子

初風呂にひたりベトナムの人想う
きねの音聞かずもちつきすみました

京都府 清水谷 旬楽坊

あくびして目出度い春と寺閑か
雪達摩色即是空を説いている

大阪市 碑 弓彦

表札も息子へ譲つて余生活き

小型車に晴着窮屈そうに乗り

大阪市 本庄 金三

日蓮の分家が政治に手を上げ

川柳塔二年全出席して

二枚目の表彰状へ持つ誇り

笠岡市 出原 真奇

三カ日過ぎてひよつこ顔を出し

鼻水をすする農夫の背が丸い

大阪府 宮地 双楽
ジェット機の音に消された立話
出しや張りが出ばなくじかれ不平面

加賀市 木村 一路

魂は君の吐息の前に揺れ

燃え尽きるとこまで燃やす気で恋し

大阪市 森本 良夫

物干しで朝顔苦情言わず咲き

OB会出席

その昔影も踏まずにいた恩師

加賀市 細呂 木魯木

バスを待つ姿さまざま雪の街

酒とみかんだけで過ごす三カ日

若本 多久志

明治百年まだ意地わるく生き残り

寒厳し死亡広告よく目立ち

千布摩擦余命を延ばす術哀れ

酔覚めの水茲は我家だなどと思

テレビ禍でこの山里も標準語

菊沢 小松園

こんな日もあると元旦雨に暮れ

働いて食つて来た手だおめでとう

幸を願う頭だ低く垂れ

氷点下生きる厳しさ膚で知り

ワンマンカーやもめ暮しという姿

多趣多芸余生に閑のない達者

初風呂に松の二十が落ちていた

ハガキ差し値上げの巾を作りかえ

気前よく飲ます出馬の肚が読め

満員のベッド割り込むコネがあり

地下足袋をはいた大工は屋根へ行き

鉋屑の長さを大工きそい合い

ふるさとを語るに大工腰を据え

大工の腕がマナイタにある寿司屋

墨壺と曲尺へお鏡餅置く大工

出札掛よもや嘔でもあるまいが

松 江 梅 里

清 水 白 柳

川 村 好 郎

釣革をそつと離れた衣裳負け

見合い写真二枚に絞つてから迷い

神様に尻向けて撮る初詣

笹買うて福が来るならちちはなし

禁煙をはめれば休煙ですという

寒波さままま街のスモッグ吹き払い

トルストイ展牛に引かれた腰を上げ

春近し山の遭難まだつづき

春の旅ガイドも春の風邪を引き

口実が血圧という齢になり

食後すぐ葉の為の飯のよう

久しぶり血圧の話あの話

叔父さんはエツチなこと許り言い

インタビュ―焼酎好きとは美女言わず

北 川 春 果

西 尾 栞

備前川柳社創立二十周年記念

吉永町文化川柳大会

日 時 二十三日(日)十二時から

会 場 吉永公会堂

兼 題 「握手」

「誠意」

「友だち」

「リボン」

「山彦」

「艶」

北川 春果選

梶川 蘇堂選

尼 緑之助選

石原 伯峯選

服部十九平選

直原七面山選

席 題

三 題

当日発表

句数兼席題を通じ各二句

記念品

「胸」

浜田久米雄選

出席者全員に備前焼ほか贈呈

兼席題を通じ三光に選者の色

紙など、出席者優先とする。

川俣柳 初篇研究

(四十五)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 故 高須唾三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

451 御家老も出しておやりとふといやつ

五雷

前田||この家老は奥家老であろう。政治向には関係せず、奥方中心の男子禁制の奥御殿に出没した。「奥家老不粋な役を司り」

(拾八)「奥家老桜の中にいたためつけ」(一〇)のように不粋で、にくまれ役を引

受けることになってた。この句、何かの事件で、平素の遺趣ばらしにわざと間違えて無理に座敷牢に軟禁されたのであろう。

しかし、もともと無罪なので「出しておやり」となった次第。「ふといやつ」は勿論、ボスの奥女中といったところであろう。

岡崎||「奥家老」は実在しなかった(大村沙華氏)故実では座敷用人で、政道批判をはばかった独得の道辞だが、そうでなくとも、この句のシチュエーションが納得できな。故事何か?

清||やはり御家老は奥家老のことだろう。か奥女中の花見遊山などについていくのも、奥家老の一つだったが、何しろ六七十才の老人だから、かえって足手まといになる。

「奥家老泊りの知れた歩きやう」(六・27)したがって、ついていってもらうのではなく、つれていってやるのだというのが主題句の意味ではなからうか。

藤井||御愛妾の母親が娘に入智恵して曰く「お殿様に寝物語にでもよく頼んで邪魔な家老奴をおん出しておやり」とは、ふとい妾だということか。出してを追放と解して、ふとい奴は御愛妾の母親と解する。

前田説の座敷牢は、一寸信じられないし、

清説ではふとい奴がきかないが、自己一流の空想をたくましくしてのこの解自信なし。川端||清説賛「参詣のお供に御家老を連れてお行きなさい」とすすめているのである

らう。「木の股を出た顔をする奥家老」。「奥家老みんな娘の気で叱り」(八・23)と普段の腹いせに、遠出に引つ張りだそうとのたくらみか?

高須||出しておやりは、奥にばかりいて、あまり外氣にふれない奥家老を、参詣とか花見に出そうと奥女中達が相談しているのであるが「ふとい奴」とあるから、後に残った女中達に何か悪だくみがあるのである。

丸||藤井説の如く解している。但し、お妾の母親ではなく、お妾自身。お妾に盾をつく家臣を追放。最後には御家老まで追い出して下さいと殿にすすめているお妾。さして太い奴。

岡田||前説に賛。ところでこの句の「家老」だが、奥家老ではなく、硬骨漢ときまっている国家老がお妾を追放する存在だったことは古川柳の約束。お妾をすでに置いて

いるのだから、江戸家老や奥家老はそれを容認す。従つて藩主が江戸詰のあいだ国

元を預かる国家老が、お妾には最も煙たい存在となる。なお岡崎氏が「川柳しなの」に載った「奥家老」という名称はなかった」という大村沙華氏の説に触れていられるが、その大村氏の説は誤りです。武鑑などに江戸家老、国家老、奥家老などと区別せず、ただ家老とだけ書いていますが、各藩では普通に使用していました。貞享年間に出た当時の絵入百科辞典ともいふべき「人倫訓蒙図案」にも、ちゃんと奥家老の図が載っており、この事は稀書複製会で原本の通り複製しています。日本古典全集にも収められております。奥家老という名称は普通語として使用されていたわけです。念のため。

438 鰻斗力先キへくふなと母しかり

五 扇

前田「意あきらか。「斗力」はばかりのこと。「うなぎをつかまへるやうにこんやいい」(二二・五)「鰻やハむごいといふと腹を立て」(二三・15)のように、味覚をよんだものがすくないが、蒲焼には次の句がある。「蒲焼もばかりで済まぬ所なり」(七・6)

清「うまいものを先に食いたくなる人の

心を詠んだ句。

藤井「うまいものを先に食うな」との注意でなく、鰻を食ったこともない様にガツガツ食うな、下品に見えるからね、という母親の注意ともとれる。とまれ母親により両方にとれる。

川端「下品だというより「鰻ばかり食べないで、他のおかずも食べなさい」という母親の説諭と解したい。相手は子供で「何でも食べなさい」とは、現代もよく見られる食事風景である。

高須「先に食うな」だから「うまいからと、そればかり先に食べてしまうと、御飯を菜なしで食べるようなことになるよ」と母親が子供を叱っている句である。

丸「高須説賛。淡々としているが、子供の習性をよく見ている。

岡田「同。上にのっている鰻ばかり食べず、下の御飯も食べろと教えた。ウナギなど土用のほか食べない家庭風景。

439 七廻忌三廻忌にて垣をゆひ 用 弓
前田「廻は回の誤り。「親の名の次第に似合ふ三廻忌」(二四・38)の通り、三廻忌、七廻忌になると分別も出来、墓の垣をくるようになる。暗にどう息子のひきしまつてくる行程を詠んだ句。三廻忌、七廻忌といわず七廻忌、三廻忌といったところ

が変っている。

藤井「死ぬと医者への払いや、葬式に金がかかり、墓場も墓石までが手一杯だ。少しづつ工事ははじめてやつと三廻忌七廻忌で、念願の墓の周囲の垣が出来上った意。郊外の新築の家も簡単な垣で三、四年我慢している家がざらにある。初めから石垣で囲まれた堂々たる家を構えている人は苦勞のない人だ。前田さんからどう息子と云わ

れては施主が可哀そうだ。三年五年してやつと人並みの墓が出来てやれやれとした所だ。

川端「夫に先立たれて、苦しかった過去をふりかえっているのだろう。七年目子供もどうにか一人前に成人し、三年忌七年忌も無難にすぎた貞女の回想。

高須「「垣をゆひ」は、墓の垣を造るところだから、息子でも貞女でもよい。残った家族が、三年五年七年と、だんだん家計も立ち直り、故人に対する感謝もわいてくるという句である。

丸「礎稿の如く解しているが、七廻忌三廻忌といったのは、父七廻忌、母三廻忌を意味しているのではないか。父の死に目ざめた道楽息子が、以来家道にはげみ、母も安らかに往生させ、ますます家業に力を入れて、七廻忌三廻忌に当つて墓地の垣を作ったというのではないか。

岡田「同。

秀句鑑賞

…前月号から…

後藤梅志

還暦へあだ多かりし年憶う

(小石)

還暦をむかえるに当り、おもうことは多々あるが、過ぎ去ったうつろなりし日を憶うとき、それは勿体なくさえ思われる。

子のこと、父母のこと。人生六十という歳はしきりに過去が思い出され、悔恨を噛みしめるのである。それは夫婦の愛をうら返す時でもあり、人間完成に近づく証左でもある。この句は「あだ多かりし」という一語がすべてを物語っている。あだは、「徒」で、かりそめ、いたずら、むだ、などと解すべきか。これがこの句を引き立てている。

ゼンマイを巻かれて亭主動き出し

(玲人)

「アナタ新聞はもういいんでしよう」

「ウン」

「日が短かいんですよ、アタシヤ今日は町会があるんだから」

「ヨッシャ」

居職のご亭主は、仕事をやり出せば脳目も

ふらず、一心不乱だが、新聞を見ながらでも仕事の段取りを考えているので尻がおもひ。この句の「ゼンマイ」は古い言葉だが、バネ仕掛けの様に亭主の働き出す状況がほの見え、句は生気を帯びている。「亭主」も、ユーモアを助けている。

中の島剣先は寂十二月

(薫風)

中の島の剣先は、淀川が土佐堀川と、堂島川とに分岐れる突端にある。天神祭りのお渡りでもない限り、人の行かないところ。高層ビルのなかった時分は、大阪城が目の前に見え、良い眺めだったが、今は話題にも「剣先き」は出ない。

今、剣先に立てば、大阪という水の都は、日、一日と喧嘩、雑音のルツボと化して、剣先には、ヒタヒタと川波がたわむれるばかりだ。全く市中の某日には、とり残された剣先の一角。十二月の某日、作者の所感句は相変らず澄み切っている。

ねだられて猫と刺身を分けて食い

(布堂)

なんとなくおもしろい句だ。

この人は猫好きと見える。猫がニャーゴと啼く声は、猫ずきには、おねだりとすぐ分かる。膝の上上がったたりもする。自分の手を嘗めれば、女の子に嘗められたような気にもなる。

ある意味で、二号さんそっくりなのである。猫を飼えば、鼠は居なくなるし、子の無い夫婦には、家族の一員である。

この句の「刺身」は徹底している。さしみが、この句を生かしたのである。

低いのも高いのもいる自衛隊

(緑之助)

自衛隊が隊を組んで市中を行進するのを、見ることはないが、駐屯地ではまああるであろう。自衛隊は市民から愛されなければならぬ。いつでも国民を災害から護りぬかねばならないと、幹部の教育が行き届いたか、大した不評も聴かぬが、ご苦労なこと。いや感謝しているほうだ。

家庭ではキャッチボールもするし、行動は大分自由がきくらしい。昔の軍隊とくらべて身長まちまちであることも当然だろう。

それにしても、此句はおもしろい句だ。

老いた母道具になって恙なし

(十悟)

母親の有難味はいくつになっても、忘れら

れないもの。頭が下がるのである。

「身を粉に砕く」という譬があるが、その通りと云えば当てはまる。母親のすることは目につかぬが、沢庵石の如し。とでも云うべきか。始めあって、終りなしである。

この句は「道具になって」が目立たぬが、千鈞の重味がある。恙なし、は母上のこと。

蒸気機関車漫画のように走るなり

(笛生)

今はもう、何処もかしこも電化して、蒸気機関車を見ることはまれだが、たまたまこれを見ると、始めて東京、横浜間を走った、ポッポと一つずつ煙りを吐く陸（おか）蒸気のような気がする。人の目は、それだけ、移り変れば、変わったように錯覚をおこす。漫画というものは、その境地をとらえたものだ。けだしこの句はそのものビシヤリである。

生きている事を他人の死に気付き

(凡九郎)

人の死をきけば、自分も死ぬんじゃないかという気がするが、この句は、それを言っているのではない。自分の存在を気付いたのである。無為であった自分自身に、今更の如く気がついた。

人の死は、厳粛なもの、ということに、私達は気付かされるのである。

作者の、ふんばつが望ましい。

次の児もつられて泣いてくる注射

(筆染)

注射というものは、常識のあるものは平気だが、野蠻人や子供は、とても恐がる。

そこへ、おいたをすれば注射しますよ。だだをこねると注射。と脅かす大人にも罪はある。子供は注射ときけば逃げ出すのである。これは、どこかの予防注射場の風景であろう。その風景描写が、まことに自然である。

なんとなく鏡にうそが欲しい今日

(美己代)

やわらかに、云ったところがよろしい。表札も、自分では書くなといっているが、これは見馴れると自分の字にいや気がさすからのこと。

鏡もそれと同じ。美醜に拘らず、時々はそのがほしくなる、のは女ごころか。真実はあまりに冷めたいのだ。

それとも、どこかヘデートでもするのだろ。うか。いや作者は、もっとフレッシュなものを感じているようだ。

つつましいデイトうどんを吹きながら

(千代)

あつあつのうどんを吹きながら、顔を見合っている、若いふたりを見るような句。このような句は、飾りっ気はなくとも、好感がもてる。

「つつましいデイト」とびったり、うどんを吹きながらの、呼吸が合っている感じであ

る。佳句。

ついそこにあるのに手さぐり遠ざかり

(正朗)

幼少から目の見えぬ人は、カンがよく、反対に中年からの人は、カンがわるいとは、よく聞く話。

つい目の前にあるものへ、手をさし延べても、手はあらぬ方へのびて探っている。

目明きが見れば、おかしくもなるが、これは笑えないではないか。

盲目（めしい）の人が、こうした句を作っていることは、痛ましいが、吾々はたまらない愛情をかんじる。

「ぼんやりと手持ぶさたな妻の留守」と対照して味わうがよい。二句ながら頂く。

新婚の宿の料理をまだ憶え

(瑞枝)

新婚であちこち泊りあるいた宿の料理を、まだ憶えている作者の、いとも確かな記憶力は羨ましいし、ほほえましい感じだ。

人の記憶力には、いろいろなムラがあり、憶えておきたいことは忘れ、ツマラス出来事は記憶に残っていて、可笑しくなる。こんなことは当り前のことであって、あながい見落している真理だ。

もし、こんな記憶を、一生もち続けることが出来たら、その人は偉だろう。

川柳は、どこまでも素朴でありたい。



ながら族

西出一栄

昨年度の本社句会でも女流作家の全出席は16対1だった。これでも女流作家のご多忙さ加減がわかるのだが、そこで、女流作家はいつ作句する時間をもたれるのか、ちよつとつかがてみた。

(到着順)

出てくれません。

兼題の数々が頭の中で右往左往来するばかり。手帳とペンを手提袋に入れて美容院に出かけます。ドライヤの中でジッと目をつむっていますと心境の変化が着想にありついた句になったりする事があります。でもしよつちゅう美容院に行く訳にもまいりませんので知れたものです。

またお医者さんの控え室で時間待ちの時など、夜は十時劇場を見てからサア作りましよう、兼題に取組みますが、遂にノートとペンを枕元に置いて床に就きます。くらやみの中でペンをノートにつけたままつづけ書きをしておきます。翌朝どうにか読めるのが面白いじゃありませんか

見る度に色増す柳 地にとどき

平凡な写生句です。よく大丸へ買物にまいります、道すがら同じ柳を幾度か見ます。

そのたびに少しづつ色が濃くなり枝が長く垂れて行きます。遂に枝が地について居りましたので幼稚な句と思いつつ川柳塔に投句さ

して戴きました。

齢に似合わず世事に浅い私には全く関係や経験のない席題に出食わした時はうんざり致します。まして英語や新語に弱い私にそうした題の時、こんなとき妹が一緒だったらなと思います。問う時の恥をしので句箋に題をしたためて、柳宏子さんに意味を解いてほしいと、SOSを発します。助け舟を得て心にねじはち巻をギョッと、何が何でも作らにやならぬと取組む時は真剣そのものです。

と、云うことになりましたと作句時間は四・六時中いつでもどこでもと云う答えになります。

湯川博士の中間子論が真夜中に閃いたように私にも一生に一句、名句がひらめいて欲しいと、いみじくも悲願をたてております。

その場その場で

山川 阿茶

課題吟などで何日までにと云う時は一寸手のすいた時とか夜仕事が終わってフリーになった時、この時は大抵苦吟、しんどい事が多いのです。ところが、

鳥の内みみずも体くらねらせて

等は往診の帰り道のみみずがヒント。

舞姿孫の色気にはつとずる

これも踊の会にまねかれ会場で出来た句。

新幹線物理数学雪に敗け

作句の時間いづどこで？ という事になりますとちよつと困ります。テレビを見ながら雑談を交わしながら孫と遊びながら新聞を読んでいるうちに、ふとヒントを得ることがございます。句によってまちまちですが、ほんとうのながら族。

おばあちゃんテレビを見てて川柳がよう出ますなど、不思議そうな嫁の顔、ふん、これどうやると差し出すと、なるほどねえおばあちゃんの見どころは違いますのやな、とおおげさなお世辞も悪い気は致しません。

いつもノートとペンはテレビの前のホーム炬燵の上で待機しています。ところがいざ作句にかかりましようとき姿勢を正すとなかなか

春なれや孔雀も恋の意志表示

これは新聞を見ながら出来た句。

行末を思う日もあり朝の風呂

朝風呂で現在の倅せを思うにつけても行末

を考えたおセンチ。

ラッシュアワーわたしのお乳房何処へいた

これも医師会誌の「うめくさ」を書きながら

ラフト出来た句です。

男みな阿呆に見えて売れ残り

これは或る人の米寿に招かれ阪大の小沢凱

夫博士に逢い「子供は、主人は」ときかれて

「売れ残ったのよ」とお答えしたら小沢

さんが私の手をとって「男が阿呆に見えたら」

とおっしゃったのでその場で出来た句です。

このように作ろうと思っただけなのにその場

その場で出来た出来た句は返ってすらす

らと考へて考へた句よりいい様に思われる

事さもありました。電車の中でも美容院で

でも考へて書きとめるようにしています。

ます。

朝夕の車の中で

中島小石

編集部からこのテーマを頂いて、私が女流作家などとおかまじい限り、但し男性でないことだけはしたかだと思ひ、ペンを取ることにいたしました。

朝は生々庵と共に診療所へ出かけ、夕方家へ帰れば孫三人にかこまれておばあちゃん遊

んで、それお風呂に入れてと毎日を逐われ逐われての日暮し、なかなか作句の時間など持てそうにもありません。

いつでしか有名な女流歌人の方のかかれ

たものの中に、台所に立ちながら、お掃除を

しながらポケットの手帳にかきとめる「箒の

先に歌がかりけり」です。というのを讀んだ

ことがありました。私も御同様に診察や調剤の

手伝いをしながら、また朝夕通勤の車の中な

どでその折々の心境や身辺雑事を考へついた

ままに書きとめるのがせきぎの山、一種のなが

ら族みたいなのではないでしょうか。

生々庵から明日の句会に手伝いに来いとい

われて、手ぶらでも行けないしと一夜漬けの

句をつくらせたり、川柳塔のメロとていであわ

てて字をならべたり誠に不勉強の限りですの

で、たまにいい句だとほめて頂いたり、句会

で抜けたりすると、生々庵は今日は下手の抜

ける日やと申しますがそれに反論する自信も

なく仰せ御尤と引下っている次第です。

本年は羊年生れ。

還暦へあだ多かりし年憶う

こんなのが箒の先に引っかけた句でしょ

うか。もっと熱心に作句にとりくむのが本当

でもあり、いい句も作るように勉強しなければ

とは思いますが今の私にはなかなか程遠い

ことのようにです。もう少し身ともに余裕が出

来たらなあと思つてはおりますが、さて暇が

出来て自由な体になった時は脳軟化症にでも

なつてしまふ頃ではないかと心細いばかり

です。

夜は読書と作句

天正千梢

午後八時頃さやかな閉店ごしらえに、はたきを掛けながら、いつも心の中で、「今日も暮れ行く異国の丘に」の唄を口ずさみつつ今日も無事一日過てせた有難さを神に感謝いたします。

入浴後、子供達はテレビ番組に目を通してゐる頃、私は栄養にもならない本でも自分の好みで毎日二時間ぐらひは必ず読書をもう何年も前から続けています。昼、店番の合間には、肩の凝らない、吉井勇のうた若山牧水のうたなどを愛読し、石仏紀行などから、だれ訪ずれる事もない忘れられた野の仏などの写真を飽きる事なく眺め入っている時は、酒の味が酔っている時はこんな気分かなと想像しながら石仏にしばし私は酔っているのです。

人の世の哀れさ、儚かなさをしみじみ味いつつ迷句を、

一人居のわびしさ金魚へも話しかけ

一と月のカレンダーの横へ各自が自分の出る日をチェックして置くのですが、毎月私の出て行く日はほとんどない有様なので「主婦之友」と料理の本などをちっとも読まずに、

詩や随筆ものばかり読んで、音楽会美術館なども度々出て行き過ぎる」と子供達から小言を言われる時もたまにあります、

三児三様の意見あり母の幸

と親馬鹿は小言まで喜んでゐる次第です。月末に本社句会の題をいただくに気が掛りながらも句会の日二日前にならないうち々々とまらず落着きません。作句の夜は読書も休み、日記も手早く書き、分り切った題を一つ一応は広辞苑を引いて確かめてから両眼をつむるようになっています。ときには店のお客様との応待の中からヒントを得る事もありま。最近では老眼鏡かけても、虫めがねの世話にならないうち々々字で苦勞する事もありま。

老眼鏡掛けてベストセラーを読みこなす

三月頃九州へ三泊の招待があるのですが句会に重なる招待を欠席すると云つて皆んなに笑われているくらい、皆さんの名句を聞かしていただきたいのです。

締切日を意識して

楠田英子

夫と男の子二人の家族四人の生活である。野郎共ばかりなので、炊事、洗濯、買物とすべて私の仕事である。貞淑？なる女気の多いためか自分の事は案外後まわしになつてしまふ。労基法の適用しない主婦業であれば時

間のやりくりはどうにでもなる。一日二、三十分の作句時間はたやすくみだされる。しかし気の合った友達と漬物の事から天下国家を論ずる雑談にふける数時間をすごすひときはあつても、作句しない日が続く。

是非しなければならぬ仕事に追われ通しの日が続くときもある。私は一日のうちこの時間を作句にわりあてていくというのではない。月始めに川柳塔が送ってくる。にわかには切十五日が意識されるとただそのことだけに作句意欲がもりあがってくる。川柳塔が配達される俄然その本能が湧きでて自分の生活の周辺、感情を心の目を見ひらいて探す。過去のことも、未来のことも、想像、空想、私の心はかけめぐる。

その中に心の足がつかずいたり、ぴかりと見えたりするとそれをあたためる。あたためて句にしようと努力する。それは朝の家事を終えてひと休みした時であったり、スカート縫いつかれて一寸日向ぼしてぼんやりしている時に、又は皆がテレビに興じてる時、同じ部屋にいなが私だけ心は川柳に走っている時がある。

七時半のニュースがすむまで家族が揃ってテレビを見る。ニュースがすめば高三の末っ子は勉強をはじめ。しかし時には悠々とテレビを見ている。私の胸は痛む、勉強はと気になる、黙っている事の苦しさ、八時になつて立ち上る。八時半頃ガタガタ音がして出てくる。正しい判断力を案外身につけているから気にしない気にしないと自分にいいきかせ

る。

ゆっくりとテレビ見てそそくさと勉強し

(四十一年九月号)

すらすらとこの句が浮かんだ。余りに考えすぎ、言葉をひねくり訂正した句より、スラスラとできた句に私の好きな句が多い、案外に純粋な心で作るからだろうか。

清澄な朝を待つて

寺田花宵

ひと口に言うてしまえば角が立ち 花宵
他人様の花は赤い。喫茶店とはまことに気楽な商売と見られもしようが、実際は中々そうはゆきません。商売と名がつけば何商売も同じ事、委しき話せば複雑ですが、閉店、後片づけ、掃除、明日の準備等々、其の間に時間は容赦無く経って行きます。まあ馴れた仕事と言うだけで毎日平凡さを過ち無く続けて行くには精神的にも可成り疲れるものです。

その上、頭の底には川柳・川柳、と微かに囁やく声があり、それと無く川柳の眼も無意識に働きます。チャリ目に映り頭に残った印象をそのままに漸く寝に就くのは大抵一日頃になりますが、その前に一通り、今日一日中で得た川柳の芽を一応十七音字にノットします。

然しこれはホンの軽い気持で書きつけておく程度に止どめ頭を空にして眠ってしまいま

す。下手は下手なりに空氣の清澄な朝を待たねばなりません。限界有る能力を少しでも高める為には最高のコンディションが要求され好きな道は他人のうかがい知れぬ娘しい道です。人の心を打つ一句、到底手の届きそうも無い仮空の峰頭に対してノートの一句一句を寸暇寸暇に覗くようにして推敲にからねばなりません。作句の真の醍醐味は實にここに有ると私は思われます。ノートを調べて見ると、冒頭の句は次のようにして投句しています。

腹立てているとは知らず流行歌

叱りよう外に無いかと考える

叱った後がむつかし事になり

一言に言うてしまおうかと思ひ

ひと口に言うてしまえば角が立ち

斯くて稚拙な推敲が終っています。近頃殊更大切な店員さんのご機嫌を取らねばならぬ哀しきマダム独り言、一粒の川柳の種に救われてホットした川柳作家の楽しい述懐でした。

寸暇川柳

三井酔夢

益々元気で君臨する姑、発育盛りの子供、患者に終始する夫、その中で多忘な主婦のあけくれである。うかうかしていたら十年一

日—あつと云う間に年を重ねてしまふ。

そこで家人に迷惑をかけず、無理のない自分の時間を捻出した。まず朝六時半起床、子供の弁当作りに始まる騒々しい第一幕も「行つて来ます」できりがつく。姑も夫も九時までは寝ているので、片付けも洗濯も中断、机の前に坐りこむ。これからの一時間余が私の天国なのである。

投句の切のメモを広げて原稿整理、走り書の推敲、苦吟がはじまる。昨夜来の着想が泡の如く消え、一句もものならぬ日もあるがこの貴重な一ときが川柳への大きな支えとなっている。九時ジャストで立ち上る、朝食、給食仕入、掃除、洗濯と雑用に追いまくられて昼は早い。午後は銀行員が来て金銭出納簿その他、下手な算盤をはじいて机の上は一変する。その上、来客、運転手、犬の世話、バラの手入れ、好きなかぎ針編、まさしく分裂症になる。

夜は夜で主人の悪友接待係。今夜は雑詠をまとめよう等と計画していてもいつもお流れ。上手だとはめられて、笑顔で酒の肴に腕をふるい、酒宴は深夜に及ぶ。揃って外出してくればもうけもの、それから落着いて読書を楽しむことになる。

作句のヒントは、おかしな話だが浴槽でのびのびしている、急にひらめく、赤裸々な自分が甦えり、緊張感がほぐれる為なのか。入浴礼讃である。布団にもぐり込み寝つくまでの僅か十分：これ又迷句が続出する時がある。姑も主人も川柳へは無関心なので、暗

がりのまま急ぎメモをとる、句の良否は問題でなく、明日まかせの走り書なのである。とにかく私は惑星、太陽のまわりを回転しながら、寸暇を惜んで自分もわりと続けようと思つてゐる。これは生活の智慧なのかも知れない。

妻はもうつかず離れず趣味に生き

川柳は真夜中につくる

丸川初甫

いつか川柳雑誌に麻生霞乃先生が「歴史は夜作られる」と題されて御作句は専ら真夜中になさいますお話が書いてありました。同じ頃に北川春果先生は、お車中では窓際の尤もよいお席につかれました時に御作句をなさいますとの御様子を拝読いたしました。作家の長沖一先生がいつかの御講演で「お父さんはお人好し」の原稿もいよいよ放送局から取りに来られる間際でしか出来ない。川柳作家の皆様もそうと違ひますかと笑わして居られました。

諸先生をミックスして、真似て居りますよ。うな私の作句法で恐れ入りますが、いよいよ締切の前夜家事万端を済まして十一時頃から車中のメモや課題を中心に一廻り二廻り三廻り後頭部がジンとなつて気がつくとい時半二時ペンを置きながら「川柳は真夜中につく

る」と題して一人楽しんで居ります。

花鉄もう減点をおどかれ 初 甫

昨年二月、旧嵯峨御所花道総司所内、花道芸術学院の試験場で、莊嚴華（真の真）実技試験の際に、直径一寸余り、長さ三寸——一尺余の竹筒七本を組み合せてその上、下を紐でくくり花器に入れて砂止めをして活けはじめますが、「この紐は必ず花器にかくして見えないようにして下さい。紐が見えたら減点です」と最初におどかされました。さて花鉄を以ておどおど活けながらこのような句が浮んだ次第でございます。

本年二月十一日、十二日もこのように受験の予定に先だつてこの句が好きでも嫌いでもなく思ひ出されました。

川柳は楽しくも

また苦し

内藤 ささ子

「女流作家の作句する時間は仲々大変なところだと思います」と編集部よりご同情あるお言葉をいただき感激にたえません。

「まさにその通り」と申し上げますと共に、これは女流作家に限らず男流作家？の方にも相通するものではないかと心ひそかに伺いを立てておりますが如何なものでしょうか。

川柳をやっておりますと投句のメ切日がすぐにやってくるように思われ、毎日毎日宿題

に追われどしどしの日ぐらしのように思われます。若い頃の多作時代には課題吟に没頭して近詠なんか、めんどくさくて見むきもしなかつたものですが、年を経るにつれて川柳の生命は近詠にこそあるべしと思ひ直し、ぼつぼつ近詠を作るようになりました。

さて私達女性の作句する時間と云われましてもやはり机の前に坐ることが一番落着きますが、洗濯をしながら、ごはんを炊きながら豆を煮ながら、化粧をしながらでも、いい句の浮ぶ時があります。

洗濯をしながら濡れた手で何べんもエンピツを握ります。

夕ぐれ、近所の八百屋さんへ行くまでの静かな道のりで一句出来る時もあります。

お化粧のパフの音にまた一句……

でも何と云っても実感句は大切にしたいと思ひますので、道を歩きながらの小事件や感動を出来るだけまとめるようにしております。

しかしこの「道を歩きながらの作句」は時として運ちゃんから「バカヤロー」気をつけろ」の怒声を頂戴しますからくれぐれも御安心……

「川柳をやめればさぞ楽だろうな——」と思ひながら、ライバルのすばらしい秀句に接するのと、たとにフアイトがムクムクと湧いてくるといふ全くもって困った慢性川柳病患者だと我ながらつくつく痛感しております。

ひよいとのぞけば仔犬もひよいとのぞくなら

栓ぬきはまだ見つからず湯もたきり
表札のよぐれを毎日見てくらし
ひやしあめの瓶にうつっている人出
飛行機のマークが見えるよい天気

句は夜ひらく

久米 奈良子

編集部より思ひがけなく女流作家はいつ作句するかと題してのご依頼にちよつと、とまどつています。たしかに男性ではないし、川柳塔同人の末席をけがしている現在、「作家にちがいないのやなあ」と今更のように恥じ入っている次第です。と申しますのも、その殆どが課題吟として残されたものので、難詠の少いわたし自身作家など程遠い存在のように思つていたからです。さて前置が長くなりましたが、かつて療養生活の絶安のベッドから眺め、感じた句らしきものが川上三太郎先生のお目にとまつて活字になったり、毎日放送の課題吟で岸本水府先生の入選句として電波にのつたことなどが、そもそも作句へのきっかけです。回復半にしてふとした縁でその後川柳句会へ出かける日が多く課題吟に追われるようになり「川柳とは課題吟と見つけたら」の如く題を与えられないと詩情も湧かぬ？ 有様に良師に恵まれながら不勉強な私は直接日常生活からこれといったヒントもつかめままに月日を重ねています。

おもしろいことに長い間寝てものを考えていたクセが抜けきれず、夜、床へ入らねばうまく頭のまとまらぬことでした。「夢は夜ひらく」ではなくて私のおおかたの句は夜ひらくというわけで。弱いつて何かと多湿な毎日は旅することも少く終日作品にとり組んだり、朱筆を持ってこども達に接していると自然句の題材も限られてくると思いますので、(ホントは感受性に乏しくうまく作れないのです)ある日のテレビドラマの一コマから、読書や人々の交流の中の心打つものにスポットをあてることにしています。心の鏡のくもる日は駄目なようですが、それなりにメモをとるようになりました。川柳塔発足以来この間一年の空白はわたしにいろいろな経験と苦しいかなしい傷あとを残してしまいました。それがあらたに作句への原動力となったのも否めぬ事実です。

さあ、今年は夜のとばりがどんな句を画かせてくれることでしょう。おそまきながら人たる誇りと自覚を再認識するとともに、しっかり自己をみつめる上においても果しない書芸への道、作句への精進をつづけてゆこうと思っています。限りある命のゆらぎをつづけるそのかき炎のハタと消える日まで。

店の閑散時に

高橋操子

父ちゃんが帰り家中電気つけ

句帳を開けてフトこの句が目につく。倅せ一ぱいの頃の句。結婚してからも趣味に理解のあった主人、家でする例会にも協力してくれました。作句も吟行もよく共にしたものでした。けれど長女が高校二年、次女が小学四年の年、三女を一夜の内に死なせ商売にも失敗、つづいて四十七才の若さで主人も他界致しました。途方にくれた句が沢山あります。やりくりの思案もつきた午前二時

けれど川柳だけは作句したものでした。

人生の責任苦勞と言いたが

苦しい句ばかり並べている中、これが人生のまして子供の親としての苦勞ではなく責任ではないかと此の句境に至ったのです。それからは弱音を吐かない私と変りました。金がなくとも世間の信用だけは失っていない私は元の呉服店を営業致しました。川柳を作り川柳に励まされたのです。

ハンドルの思案この先工事中

車に相乗りして配達しました。机に向って時間をとらなくても車の中で手帳に書きとどめました。雑詠はどうしても自分の人生句になり勝ちです。題詠は割合客観句になります。娘二人も川柳が好きでいそがしい店のひまを見ては、一家川柳に楽しい時間を過す時もあります。

おばあちゃん、おばあちゃんと甘えてくれる孫の句が此の頃多くなりました。お土産を孫と約束して今日此の頃旅にもよく出ます。バスガイド富士晴れてますはれてます

生活の句

宮尾あいき

午前六時起床、午後十二時就寝、これが私の日常勤務時間です。

病身の夫とまだあと四人の子供との六人暮らしの主婦、それにさやかな食品店の店主の私には、自分だけの時間は一日中ほとんどありません。ですから作句するのは働いている時間中と云う事になります。

店売りの天婦羅をあげながら、はねた油に思わず顔をおおい、フト浮んだ句です。

天婦羅にされたうらみのイカが跳ね

昼食の焼飯へ入れる胡椒が鼻へ飛び込んでクシャミと共に飛び出た句

焼飯にきかず胡椒が鼻へきき

仕入れにゆくバスの中、ハンサムの隣とおじいちゃんに隣に空席がありました。

同じならハンサムの隣へバスの席

高令の人がバスへ乗込んで来ました。

バスの席ゆずる若さを持ち合わせ

席をゆずりながら私はこの句を作りました。こうした日常生活の私に月二回か三回の句会へ出ることがどんなに嬉しいことか、何もかも忘れて作句妙味にふけるのは最大の魅力です。

その待ちに待った句会にも出られない時があります。夫のごきげんの悪い時、娘の都合

で店番の出来ない時、貞女になり賢母になつて欠席するのです。心は句会に飛びながら悪女にはなれず貞女も阿呆らしくでもたとえ一度でも二度でも、句会へ出られますことを有難いなと思っています。私の命の続くかぎり私なりの生活の句を作つてゆきたいと願つております。

句想がわく時に

岩田 みよ

どんな場合にでも手帖とペンを持っております。スカスカと切れ味のいいレザーのリズムを楽しみながら仕事をしている時、フト思いがけず句が浮かぶことがあります。その時はビタリと仕事は中止します。店のヤング連中は、「はーん」と顔を見合わせてニヤリとします。お客様もよく知っておられる方は、「忘れんうちに書いときなはれ」と云つてくれます。スグ浮んだ句を書きとめておく。なんとなく家の空気の重い日もあります。これはどこの家庭にもあることでしょうが、そんな時は、その重い空気をどうして発散さ

雅号ぶつちやけばなし

(26)

す
い
む



み
つ
い

・三井 醉夢・

その昔、川柳への偏見は著しく、文学とはおよそ縁のない狂句の類と思つていた。興味本位で『毎日柳壇』に投句したのが、昭和三十四年頃ここで故麻生先生の存在を知り、川柳雑誌を紹介された。「川柳とは、人間陶冶の詩である。……」に初まる師の心に、私は自分の愚かさをいやと云う程知らされた。この「俗」の世界を読み上げる川柳に、私は私なりに、一握りの詩を夢みたい。この夢がはかなくとも、生涯酔いしれて悔なしと、思い上った「醉夢」誕生である。それ以来、かけ声ばかりで一向にいい句は生れない。今はただ、川柳という水槽で、ちよろちよろ泳いでいたい、おたまじゃくしなのである。

(主婦 三十九才)

せるのでしょうか。そんなとき出来た句に、妻の抵抗一日だけの雲がくれ
ということになります。

女というものは若くても老いても泣けば気がすむらしい。しかし、こんな句も出来ることもあります。

泣くときに泣きたい部屋なし大家内

また月曜日の休日には、みなが外出します。そんなときは自分一人になって、なにか解放されたようにうれしくなります。そういう日は作句するたのしさに、きょうの孤独を大切にすることもあります。

色紙短冊
書画用品

大友成子

丹 青 堂

電話 二二七二

沖縄で思う

服部十九平

朝鮮動乱で日本の経済界がうろつたのは比較にならぬほど、沖縄は基地経済に依存している。

田舎を廻ってみても、民家がブロックの住宅建設を続々やっているのが目だつ、去年来たときは、ひどい変りようだ、土地は米軍に接収されその補償金が這入り、人間は米軍労務に出て百姓をしている以上の現金収入になる、全く基地景気である。

併し祖国復帰を願う住民の悲願はテンエイジャのガイド嬢の言葉にも伺える、若いガイド嬢が自分の声に自分で涙して語る沖縄戦

の実相、そして何のためろうことなく当時の軍国調を讃美し、当時の軍歌を歌う、内地の同年輩の青少年に比して、聞く方も目頭が熱くなるのは、旅の感傷からではない。この少女がまた、まなじりを峻しくして祖国復帰を訴えるからである。

私は内地でなく、沖縄まで来て、期待するテンエイジャの理想像を見る思いがした。

☆

波に浮く祖国復帰のプラカード
ひめゆりに涙すガイド基地なじる

掘ればなお遺骨出る丘カヤ茂る

・ 詠 ・

・ 近 ・

大阪市 橋本緑雨

いつの間に風邪がうつった倦怠期

大洲市 米沢 曉明

心得て飲んでいるのにまだ注意
犬連れて寒いとも言わず走るなり

冬の枯木まだおちぬ落葉あり

すり切れた下駄で見送りに出て送り

須坂市 高峰 柳児

口下手がその上みじめに哭き続け

故郷をけなし出稼ぎ春を発ち

物干で見るとは惜しい派手な火事

末席に頑固が居った多数決

肩車一番高いとはしやぐ子
明治百年明治生まれを得意がり
峠からあれがたしかに我が家の灯
かつぎ屋もゆっくり休む三カ日

上田市 金子 吞風

金策に出たのが酔って来た不思議
父うさんと歩いて何も喰わず来る

自衛隊土工のように頼まれる

烈士の勲章

— 大陸放浪 —

東野大八

植一雄が古いサンデー毎日特別号に「朔北の十字架」というのを書いている。

ホコリだらけのこの本を、廢品回収用に土間に積みあげた古本のなかからみつけ出し、つい読んでみた。植一流の「夕陽と拳銃」式フィクションで面白おかしく書いてある。さし絵は風間完で、当時のハルビン駅が描かれている。懐しい図柄である。それを眺めているうち、私は若い二十代の、自分の大陸記者生活を昨日のように思いうかべると同時に、ある一人の人物をまざまざと陰の底に浮かび上らせた。その人の名は、前田豊三郎といつても一般の人にはおなじみは皆無だが、私にとっては永久に忘れることのできない人物の名なのである。その名を口にする私の顔はしがんでしまう。辛く悲しい想い出の人。

植の書いたその小説の主人公は、横川省三沖楨介である。これまた今どきの若い人には丸っきり無縁の人物である。しかし、戦前は沖、横川といえはハルビン郊外の志士の碑の主で、国民学校の教科書にも載り、当時の小

国民の血をたぎらせたものだ。

往時、ハルビンの観光客は、駅頭の伊藤博文の碑と共に、南郊外の二志士の碑は必ず訪れたものだった。

沖、横川は日露戦争当時、北滿州へ内蒙古から同志と潜入、ロシア軍の軍事輸送ルートにの鉄道爆破を任務とした、特殊任務班の仲間なのであった。

二人は、ヤール河の橋の近くに設営し、その橋梁を爆破すべく準備中、ロシア軍に捕えられる。仲間がみんな出たあとで、踏み込んだきたのは、フラルキ駅の鉄道保安司令メジヤーク大佐の指揮に属する騎兵第二十六中隊のゲジン軍曹以下六名。

この巡察隊は、午前五時トルチハ駅を出て南下するうち、ヤール河畔に怪しいテントを発見する。馬を馳つて、そのテントへ、「誰だッ」「出る」とどなったが反応がない。とび込んでみると汚いラマ僧が二人坐っているだけだった。

「何んだ、坊主か」といってゲジン軍曹が

一旦外へ出たが、兵の一人が言った。

「あのラマ僧は臭い、セトびきの腕を持っている。ラマ僧は、こんなものは使わない」
こうして二人はつかまり、壮烈な二烈士銃殺の場と相成る。

私はこれを読んでいて、こりやどうも立派すぎて、丸つきり昔の教科書の二番せんじだと思つた。教科書にないのは、お徳というハルビンの日本旅館の美くしい女将が登場して、横川クンに惚れてめんめんと女ごころを披露している濡れ場だ。

さて、いい気な右の小説に対する、問題の人、前田豊三郎だが、この横川、沖の同じ同志で、ハイラルから別行動をとった井戸川班の志士である。

奉天の松島町といえは、満鉄鉄道総局横の、うらぶれた日本人街である。当時の若い私は、そのとある露次の中の、みすばらしいもたやの一軒の前に立っていた。表札には、ただ「前田」とある黄色い紙片があるだけ。戸をあけると、ひきつけ髪も真白な老婆が現れた。品のよい、まるで老大家のご隠居さまといった、気品溢れる風態の御仁だ。

「前田先生はご在宅ですか」と名刺を出す、一べつするなり老婆は、あの、と口ごもり、はげしいためらいの色をみせた。

「僕は先生を十日以上、記事にさせて頂こうと捜し回ったのですよ」

と意気昂然と私はいった。そのトタン「どうぞ」という声が奥の間からかかった。まぎれもなくその声こそ、目指す前田氏その人と知

れた。

面長な顔に、キラリと人を射るまなざし、びたりと正座した枯木のような身体には、人を近づけぬ偉厳すら漂っている。だが、その言葉はひどくもつれて、あきらかに中風の前兆とみてとれた。

「貴方は、沖や、横川のことをききに來られたのでありましょうな」

老人はそうダメを押すように言った。

「いえ、ちがいます。あと十日したら四月二十一日、二烈士の銃殺の命日です。そのときの紙面に先生のことを載せたくて、先生のお働きだけを書くために」というようなことを私は言った。何分三十年以上も昔のことだから、よくは覚えていないが、筋道だけは記憶にある。

ほう、わしのね、そういって老人は莞爾と笑った。その翁のような美しい笑顔。よくぞ來られた、と老人はつづけていうと、忙しく口辺をぬぐった。よだが、一言一語ずつ口をとめどなく濡らせていくが、意外に語り口はたしかだ。

「沖、横川もわたしたちも、働きの点ですべてが同じで全く差別はない。いささかもな、ただ、あの二人は死ぎわがよくて潔かっただけだ。彼ら二人よりも抜群の勲をたてた井戸川、中山、脇など、わしからいえばあの二人の引き立て役になりおうせた形だ。むしろその死や、晩年は、二人より無惨凄烈だと私は同情しておる。この私とてこの有様、瑞六等切りではめしも食いかねる」

「瑞六、旭三あたりではないのですか」と愕いた私。瑞六とは田舎の老校長の退任相、当、旭三なら師団長退役クラスに匹敵する。

「でもないんだ、おれたちはスパイで、謀略の一隱密にすぎんものじゃから、晩年の処遇も現役の下士官より劣るも当然」

私はその自嘲的な言葉を味気なくかみしめた。

言語が不自由なので、取材は夕刻までかかった。その話の内容は今思ってもずば抜けた面白さで、巷間にきく横川、沖の比ではない。私は婦社すると懸命にその訪問記を書いた。へったらしい自信まんまんだった。だが、紙面へ載ったのは、その十分の一にもみたなかった。がっかりした私を、編集局長はとある居酒屋へ連れこんで、しみじみとこう述べた。

「文章はヘタでもすばらしい内容で、君の原稿も真実味が溢れていた。だが、それをわしは半分にして、名文にまとめあげたものの軍の検閲がそれをズタズタにしまったのだ。その将校の言い分はこうだ。沖、横川よりすばらしい志士が出たのでは具合が悪い。教科書がウソになつて書きかえねばならんからな、とね。わかるか、このイミが！お前は立派な仕事をしてくれたんだが……」

彼はそういって、懷ろからくしゃくしゃの封筒をとり出した。表にエンピツで局長賞とかいてあった。

あとでみると、中から当時イノシシの十円がとび出し、私はキモを潰したが、今思えば

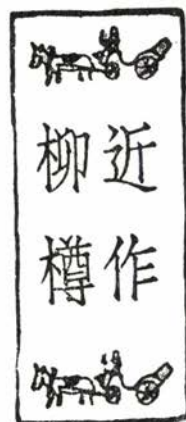
これは人情家のその局長の自前であつたことがわかる。しかし、局長賞は局長賞である。私は貰った十円の中から、金三円をさき、桐の箱詰のカステラを買って、前田氏の浪宅を訪ねた。すると、かの老婦人がびたりと上りがまちに正座してこういった。

「主人は新聞を待ちかね、貴方の記事をおさばるように読んでおりました。でも、貴方がお見えになればこういつてくれとの言づけでございました。病気が重くもう何事も語れないから、一切今後はおあいできません」とりん然と一切今後はおあいできませんと「りん然と一切今後はおあいできませんと」る眼は、私をキッとみすえて動かない。私はカステラを抱えたまま、すぐごとと表へ引き返した。

後味は悪くとも、俺は俺だけのことをしたんだ、その支えだけが若い私の心の底に寂しく残った。その夜、私は泥のように酔つて、十間房の鮮媚と抱き合つて眠った。

檀の「朝北の十字架」は、そんなことは丸つきり無縁に、講談調で終始している。私は売文の虚しさをこのときほど感じたことはない。

前田豊三郎の怒りは、私一人の上に爆発したものでともよりないであろう。だが、その憤怒の最後にトドメをさした者は私自身にほかならない。紅いさんご珠をぶすりと髪に刺し、鋭く私を見据えた老婦人の冷たい眼がやがて老残の私に風のように追つてきた。私は急いで、その古本を土間にほうり出してしたのである。



西尾 栗選

大阪府 井上美恵子

ガールフレンドらしい電話標準語

日記帳昨日と同じ今日を悔い

一徹な老父の寝顔が無邪気なり

立読みの知識で手相みて上げる

終業ベルでは騒音よさようなら

衣食住足り退屈な熱帯魚

目指す足間遅え炬燵のさわがしさ

姫路市 前田美己代

騙まされてみたい鏡をまた覗き

浮気もう時効年輪の癌となり

分別があつて女の裏表

強烈なリズムに官能酷使する

背に腹をかえても貧が付きまとい

人垣に聞いてやじ馬得心し

竹原市 三宅不朽

枯れてなお落葉の音にある詩心

なす事もなく脈搏をみていたり

母の手がますます荒る三カ日

さすらいの旅の名前は別にもち

芸のない男と言われ家を建ち

金を追う俺が金に追われてい

竹原市 小島蘭幸

冬になれば人間夏の良さを言う

子が風呂へ入りテレビはニュースする

ちつぽけな僕だが君が居てくれる

海広くよくよすなと言うてくれ

遅れそうなのにシグナル赤になり

末つ子の不満は同じように分け

桜井市 岩本雀踊子

東西南北富士は絵になる姿なり

盆さいの松は石にしがみつ

梅林の茶店も人手不足なり

仏壇に母は小さく泣きにくる

女の子ヤツパリ母の味方なり

愛知県 横

自転車屋足の踏み場もなく儲け

招待券くれた相手は来ておらず

女は損とうちの女房も云う

知事賞は知事を選んだわけでなし

よろめきのドラマへ妻も息をのみ

島根県 堀

眼がさめてから初夢みな忘れ

泣かせもし笑わせもする子を頼り

見えぬ眼が何故かこんなに泣ける夜

耳にある記憶はほんに泡のよう

妻の目を借りて湖上の雪景色

伊丹市 貴

テープした声は自分のとちがい

顛末書上手にかいて疑われ

そう言えばみな但し書いる社則

節酒したぐらいで学費おぎなえず

風呂敷は男が持てば野暮にみえ

大阪市 和

抱きあげてみたい小羊牧は春

田 痴 亭

紫 光

金貸して冷たい打算に女生き

ジンフィズカツプにムード透き通り

特価品洗えば縮むとは書いていず

純愛もとどのつまりは銭がいり

堺市 斎

恐わごとと当り番みる宝くじ

甘酒をつき合わされて女連れ

まつしぐら行くだけの芸ハイウエー

紙どころかビニールより薄い人情

登校の子らガヤガヤと寒がらず

松原市 谷

心こめた荷物手カギで扱われ

禿げてゆく型は兄弟でも違うらし

正座して雑念払う墨をすり

掛時計俺の寿命を刻む音

ひそやかに触れれば乳房生きており

米子市 八

産業をわたしも担う手内職

中年の恋分別を先に立て

明日がある暮らし母子でうたう唄

あたたためて置いた言葉が唇に出ず

初詣かぜけをおした老母を連れ

大和郡山市 中

内 孚 彦

藤 亜 也

垣 史 好

木 千 代

両巨頭握手した手にある温み

人間を見すかしてか猫目を細む

悲しさは人間だけが嘘を知る

アルバイト過ぎて就職怪うみる

鳥取県 鈴木村 諷子

亡くなつた臉の母は年取らず

研修と言つても農夫飲めもせず

ふり向いてカマキリほどの抵抗か

氣の弱い奴が冗うだろ蛇バンド

大阪市 小東 琴女

環境がどうのこうのと金が出来

食べ残し食べた母だけあたらない

束縛はしないが勝手は許されず

スポーツマンシップで恋を獲得す

加賀市 池田 せき子

退院へ恋の焰は伏せたまま

眠れない夜を読み返す智恵子抄

迎春へ二十才の心清く澄み

恋苦し君を日記で責めて見る

高知市 田内 文子

冗談にされホステスの口説れず

よろめいた髪夕月が見てしまい

歳月の何時か二人に垣が出来

あきらめた恋へ女の性哀し

大阪市 江城 功雄

一筋の道生涯を貧に逝き

愛情は糧にはならぬ金が欲し

ささやかな奢り新幹線の旅

大の字に寝れる私の城が欲し

米子市 林 瑞枝

霞ちる湖上で白鳥冬に堪え

着ぶくれて貴婦人羊の如く見え

義姉さんに甘いと妹少し妬き

只今の声に背伸びの大あくび

仙台市 川村 映輝

夢もなく春三日を飲んでねる

元日の誕生日は忘れられ

料理持つ手はスリツパ揃えた手

一票で議員を左右するつもり

大阪市 小谷 葉子

無表情黒一色にかくす恋

伊賀上野

芭蕉庵商魂のない安らかさ

通天閣死角がそこに待つており

空しさをこども晴着は替えてくれ

松山市 河本 南牛 史

子にもろた年玉孫の数に分け
一豊の妻が手本と臍くりし

鳥取市 藤 本 和 宏

慰安旅行船に酔いパスに酔い
呼主によりて呼名の変る主婦

愛媛県 嵯 本 満 子

やる瀬なさ額を窓にこすりつけ

はんわかのムードへ無情な客が来る

がむしやらに手を引いてくれる人が欲し

十円が安い高いの市場かご

堺 市 羽 田 一 扇

散歩する身重の妻に歩を合せ

質流れゴルフクラブも顔を見せ

淋しげに笑つても笑クボは消えず

慇懃に交通違反認めさせ

八幡浜市 別 宮 すすき

再婚はあなたと云えずお父ちゃん

お銚子をもつと妻にもでる色気

下駄の緒に紅をのこして四十すぎ

ひとことも云えず灰皿山となり

出雲市 森 山 健 太 郎

一応は会費制です後援会

箒まで東京の名を付けたがり

限界をうろうろさせて女笑む

惚れている証拠の悪口とは取らず

鳥取市 藤

宿題へ母は学力しかと見せ

本 和 宏

雨蛙テルテル坊主のそばで啼く

自動ドア一萬引者へもサツと開き

いい便り心臓の音聞え出し

大阪市 古 川 集 一

初詣鈴振る父のかさ低し

使われている身無理した笑いよう

接え室とて花嫁くつろげず

ふところ手選挙カーからおじぎされ

松江市 錦 織 陽 子

人の世話出来るほど癒え春近し

木枯にふきまくられて試歩に出る

愛すでに遠のきみにくさだけ残り

退院日決めた大安2重印

奈良市 村 上 春 己

僕よりもながい祈りをする女

山焼を待つ山肌に冬の色

歩行者の顔で信号を鹿渡り

大田市 藤 田 軒 太 楼

待て暫しここで笑顔は見せられぬ

共学の見栄が毎晩寝敷する

悪女にも貞女にもなる紅をひき

善通寺市 伊藤歌子

選挙戦黒い霧払えの一本がたな

木枯しが夜更けの窓をノックする

郊外の空地団地に早替り

広島市 上代美文

一票へどうせ期待はしておらず

幸せな猫は背伸びをして出かけ

これだけは要ります妻の家計簿

鳥取市 近藤秋星

結婚三十年無言で顎をしやくるだけ

花婿は沈黙行型でよし

その為の女と男勝手過ぎ

島根県 小砂白汀

払いのける姿勢で竹は雪を待ち

いたわりの言葉白衣をふと慕い

アベックで病院行きとは艶の無い

島根県 石田清泉

水仙の思うに委せぬ気のあせり

値を割つた数の子も見ぬ台所

群衆をたのみ羊はついてゆき

竹原市 時広一路

正直が過ぎて変人とも言われ

慰める積りが先に酔っぱらい

死の灰の有るとも見えぬ空の澄み

河内長野市 森本黒天子

出かしたと云いたい婿が見当らず

有難い事老人をそつとして呉れる

むつとりすれば心を見すかされ

新潟県 高野不二

泥棒が雇われていたガードマン

事故死した記事に笑つた顔ばかり

モーニング汚してもどる上機嫌

島根県 堀江芳子

目も鼻もこすつて父は嬉し泣き

もう寝ろへ夫の情がしみており

雪踏ます夫の顔のあどけなさ

竜野市 森下峰子

振袖でスネが出そうな歩が揃い

嘘ついた相手とうっかり忘れかけ

名札つけ弱い商売だと思ひ

千葉県 鳥飼春泥

ご招待祝儀包ますように来る

くちづけは膝から下を写して居

いつまでもして欲しい角かくし

寝屋川市 福田隆子

本当を言つていつまでもめている

ストープに近いとこより年令座

ズル休み取る子の電話かけさされ

名古屋市 花東千久良

親切の片鱗見付けた恋い心
潮時か口説上手か溜め涙
吃驚させてと断わる女の赤電話

宇部市 櫛部 い さ 夢

生れて始めての裁判に勝つた二句
信念を通し被告として三年

その瞬間裁判長の神の顔
今年なら産んでもよいと母勝手

愛媛県 関 本 柳 剛

冬枯れのものの匂いにある生命
国訛り容れて相部屋巾が出来
カーテンで相部屋仕切るのも個性

石川県 三 宅 ろ 亭

おやじより大学の子の気嫌とり
野におけば結構人気ある男
読んではかり居ると母は気にかかり

新潟市 平 井 露 芳

六年ぶり丸亀帰省
スモッグは何処な讃岐の富士が問い
学校まで丹下芸術活きて建ち

源義経完

雲となり九郎もさらばさらばです

新潟市 中 谷 利 美

ぎりぎりの線でホステス挑戦す
金がないから借りるのに要る予金
悪友にいわせば僕に過ぎた妻

新潟市 中 溪 慶 彦

半々を泣いて商談成立す
有りのまま言えば毒舌家といわれ
急所つく割に怒つていない顔

羽曳野市 麻 野 幽 玄

年玉の落ちた火鉢へ子は騒ぎ
四十の子なき抵抗酒覚え
旅に来て雪も又よし差し向い

鳥取市 小 林 由 多 香

おねだりの助太刀姉と打合わせ
灸すえてまだまだ田畑まかせれず
流感を出張の父持ち帰り

鳥取市 細 谷 勇 仁

新世帯カーテン引いてからの幸
釣り落し話する度でかくなり
あられ降る頃ようやくに農終る

羽曳野市 河 原 林 比 呂 路

交差点親の違反を子がとがめ
癒え近し風に吹かれて試歩の道
流行も見向きもしない妻でよし

高槻市 山 田 ス ミ 子

それぞれに故郷があつて汽車が混み
父ちゃんの解答出ぬまま年が明け
逢うて見りや何んでもない事を話

高知県 山 川 勝 子

大人だけの正月餅を持てあまし
七十七川柳一と筋生き抜く氣
老人の喋る合の手何か食べ

島根県 鈴木 壮樹

福耳といわれる我が子に託す夢

欠点があり人間あじがあり

天災か人災か今日も山の遭難記

広島県 高橋 鬼焼

身にあまる言葉他人はゆうてくれ

笑い声となりは何をする人ぞ

出雲市 王 紫

麵棒に着かず離れずそばは伸び

明日は売る仔牛へ藁を敷き換える

宮崎県 野口 卯之助

好き嫌い言えば食べずにおれと父

枯れること知らぬ造花の色に厭き

大阪市 武居 寿美司

娘三人抱負を話すかしましき

あきる程テレビを見てた三力日

大洲市 堀内 暁風

喜劇だと面白がるも第三者

たまご酒ぐらいでなれる風邪を引き

下関市 志賀 木石

抜いてつたクルマの事故を見て通り

体当りしたら開けた突破口

北九州市 藤田 独楽

値を聞いてそれから品を決めるくせ

大晦日マネキン服を脱いだまま

ハワイ 上田 紅溪

過去の苦を何時まで背負い愚痴を云う

クリスマス墓場は花の贈り物

八幡浜市 山本 初子

医者の前きて金のない顔もせず

大臣に長靴はかす雪が降り

岡山県 目賀 芳月

ジワジワと自家用族に包囲され

数の子の歴史を末つ子に教え

布施市 晋本 幸子

内攻性寝言で起きて発散させ

白衣のトゲ結婚してか丸るくなり

大阪市 西本 保夫

幹事さんのお情けアイサツさせてくれ

喧嘩部屋と名付けたがよい勉強部屋

松山市 西川 みやこ

待望のオモチヤへ約束ついてくる

栄養士己が栄養をもてあまし

三次市 和泉 松風

夕方の通勤列車はよくしゃべり

野性に負けて今日の悔を知り

竹原市 脇本 政己

よちよちの小犬をようも棄てた人
子が居ない夫婦雑煮がまたあまり

京都府 菊

沢 破 天

泣くだけの知恵で大きな方をと
り二三回振つてためす子の貯金

大阪府 石

田 水 郷

青春をかけた句集が謄写刷り
人間は死ぬもの壺はわれるもの

西宮市 船

津 千 夏

肥満社長おどけて見える蝶ネクタイ
年毎に身ぐるみはいでも羊肥え

高知市 永

野 舞 子

お年玉孫には孫の予算案
ごめんなさいの一言言えぬ娘に育ち

鳥取市 藤

本 征 也

大好きと顔も見ないで言つて逃げ
虫好かん人と云いつつ追いて来る

鳥取市 河

口 忠 志

損徳で割り切れません友の味
肩抱き合つて涙の久しぶり

鳥取市 藤

本 鎮 也

信ずるが故に棘ある言葉も出
カステラ切つて私の分忘れ

鳥取市 藤

本 佳 女

ものわかり良いとおだてて子はせびり

うますぎる夢が気になる朝の膳

鳥取市

細 谷 長 平

大型の船眠るなりストの浜

探険隊不毛の果ての月に佇ち

泉佐野市

大 工 千 代 子

大阪はけつね(狐)ゑべす(戎)と悪びれず
文明は早く死ぬよ怪我せえよ

中村市

岡 本 香 芳

止まる度び話とぎれるバスの旅
足摺は粉雪舞いて椿咲く

愛媛県

豊 島 二 九 三

温泉の帰りなんぼ使こたなんぼ使こた
葬式へあすはわが身の列つづく

広島県

南 条 露 声

もう正月じゃないよと子を叱り

島根県

大 森 孝 華

年金の死亡しらべにふとさびし

八代市

松 田 永 雄

いいじゃないか世間は世間君と僕
和服着せ父に似ていると母は言い

岡山県

内 海 碧 人

初詣でお願いごとの言いのこし
三カ日早く済めばと思う妻

大阪府

池 田 豊 平 次

名古屋

吉 田 文 枝

(川柳戦国志・八)

織田信長 (中)

富士野鞍馬

京都入

永禄十年(一五六七)正親町天皇の勅使立入頼隆が、清洲の信長のところへ来て、四書を下した。それは、皇太子元服の費用、皇居營繕費用の献金、尾張、美濃国内の皇室料地の回復のことであった。こういうことで勅使が下向したのは、この信長のところからはじめてであった。

たまたま、十三代將軍足利義輝の弟義昭が松永久秀に攻められて、信長をたよって来たので、永禄十一年(一五六八)八月、義昭を擁して、途中を平定して京都へ入った。そして入京後の信長の評判はよかったのである。

姉川合戦

永禄十一年(一五六八)に、信長の妹お市を、江州の浅井長政と結婚させていたが、戦国のならいで、天正元年(一五七三)徳川家

康と連合して、江州姉川に長政を改め破った

姉川へ妹嫁を責に行き (一四〇18)

川の名は姉敵將は妹嫁 (一二四21)

姉川で織田目にならぬ妹嫁 (九八11)

妹嫁を姉川で切り崩し (八四24)

姉川で深く負けた浅井ちゑ (八五3)

などと、妹嫁をつかつて狂句によまれていく。

この時信長は、妹のお市を引き戻して、家臣の柴田勝家に再嫁せしめたが、天正十一年(一五八三)北の庄で勝家とともに死んだ。長政との三人の娘の長女がのちの淀君で、二女は京極高次の妻、三女は徳川秀忠と結婚して、家光と後水尾天皇の中宮和子とを生んだのである。

藤吉郎と光秀

木下藤吉郎(秀吉)は、永禄元年(一五五八)に召抱えたのであった。

信長へお国者だと申上げ (五5)

藤吉郎も信長と同国尾張の産である。

信長は日本一の猿つかひ (一〇三18)

遊興の場所で藤吉御かかへ (一二30)

藤吉郎の顔は猿に似ていたといわれている。

あいつ奴はもと黒鴨と明智いひ (拾六)

藤吉が知恵十兵衛をお先にし (一〇九45)

また、明智十兵衛光秀は、永禄九年(一五六六)に信長に召抱えられた。その前は越前の朝倉氏に居たのである。

そして藤吉郎は信長より二才下、光秀は六才上であった。

安土城

江州の安土城は、天正四年(一五七六)に起工して、天正七年に完成した。

信長は、泉州堺の妙国寺の蘇鉄を所望して安土の城内に移植したが、その蘇鉄が毎夜妙国寺へ帰ろうと泣くので、伐り倒そうとしたが祟り、いろいろ奇異なことがあったので、さすがの信長も我を折って妙国寺へ返した。という伝説がある。それを川柳は、

信長の下知にそてつはしたがわす (三五6)

釣鐘も蘇鉄も故郷恋しがり (四三8)

大きな泣むし釣鐘と蘇鉄也 (一〇六24)

二君には仕へぬ蘇鉄三井の鐘 (一四〇19)

と詠んでいる。釣鐘は三井寺の鐘で、弁慶が叡山へ引ずりあげたが「帰えろかえろ」と泣

いたといわれている。

この安土城は、武將の權威の象徴として、同時に住宅としては最初のもので、壮麗なものであったが、光秀謀反の時、信長の次男信雄によって焼かれてしまった。

石山本願寺

信長は、ヨーロッパの知識を入れ、新しいことを好み、キリスト宣教師を保護した。

天正七年（一五七九）十月には、安土の淨嚴院で、日蓮宗と浄土宗との宗論に、信長は浄土宗を勝と判定した。という話もあり、また本願寺には圧迫を加え、石山本願寺（大阪）の土地を明け渡せといったが、承知しなかったで、怒って兵を起し、座主顯如上人を追放した。その本願寺は、泉州鷺の森に拠つたので、天正八年（一五八〇）五月、丹羽長秀に命じて、一万余の兵で攻めたが、丹羽の怪僧に切りまくられた。という話も伝わっている。

城わたせ一向まかりなりませぬ

（天五智一）

石山を追はれ留るは鷺の森（七八一〇）

織田めには一向ならぬ門徒方（八四一〇）

鷺の森門徒鳥になるところ（一〇〇四）

等と川柳に詠まれ、本願寺は一向宗であった。

後の本能寺、信長最後については、

六月二日いい気味と門徒いい（七一三）

本能寺安土の意趣で高みで見（拾五二五）と詠まれている。本能寺は日蓮宗であった。

私のメモから

剣花坊氏にお会いして

吉田水車

去る昭和八年十月十五日に川柳雑誌社十周年の記念事業として東京句会があり、路郎先生始め同人すべて十四名来会者百三十六名の盛会でした。筆者も幸い出席出来て在京の大先輩諸氏と見ることが出来たのは今にしてなつかしい思い出です。中でも新川柳の先駆者井上剣花坊氏の声咳に接し得たのは忘れることが出来ません。かつての谷脇素文との名コンビで川柳の漫画化は一世を風びしたものでした。筆者の少年の頃講談社の大衆雑誌でそうした漫画を楽しみにしたものです。

一部では川柳は漫画であると考え考えられるようでしたが革新川柳と叫んで自らも大いに作句、新川柳の先駆者を以て任じて居た。そのための一手段として漫画をかりて世に問われたものと推察します。句そのものは是非は別として他面自ら主宰する柳詰に拠って新川柳の啓発に尽瘁された。

井上剣花坊句集（井上信子編）を通覧して作句力の旺盛さにも打たれますが全体とし

て、その句は後進を導く叱咤の号令のように、川柳の母胎である柳樽を認めながらもそうしては居られない革新への苦惱が沁んでいるように思われて、何の世界にもある先駆者の英知と精進を深く感じる次第です。

因に上記東京句会の十月十五日から一年足らずの翌九年十月十一日六十五才で惜しくも長逝されました。

「井上剣花坊句集」

五四〇ページ
定価一〇〇〇円

井上剣花坊、井上信子先生の遺児である井上鳳吉氏が、ことしは剣花坊先生の三十三回忌にあたるので、ここに編まれたのがこの句集である。

旺巻ということばこそこの大句集にあてはまるものである。

「川柳を作る人に」と題して、川柳の歴史から説き、川柳を作る人々を導く名論もあり、川柳家必携の書である。

発行所 東京都千代田区五番町五番地
株式会社 市ヶ谷出版社

★

井上剣花坊三十三回忌川柳大会

劍師直門の川上三太郎、村田周魚、渡辺尺かく氏は十数氏の発起で、五月五日一時から鎌倉建長寺正統院（劍師終焉の間）で開かれる。（本誌一月号柳界展望参照）

いのちある句

(9)

戸田古方

「いのちある句」とは麻生路郎先生の遺訓の一つです。「川柳雑誌」時代先生の筆になる「各地柳壇」の題字の横に「いのちある句を創れ」とルビの様に刷りこまれておりました。

先生のいわゆる「いのちある句」は近代文学の作品に見合えるような句をつくれとまではおっしゃってはいなかったとも思えます。しかし、もっと努力して、そこまでガンバレといっていられるようにも思えるのです。先生の句集「旅人」を見ておきますと、どこまでも長篇に発展して行くことのできそうな句に出くわします、これから少し、そういう句をみせていただこうと思います。

その前座というか露払いの意味で私が先生にほめていただいた句と豆秋さんの珠玉のような散文川柳をみていただきますしょう。

静や静 頼朝の眼と政子の眼

これは昭和十五年に出版した「川柳二千六百年史」の中にあるのですが、鎌倉鶴岡八幡の場面にとどまらず、「義経千本桜」や「義経記」にまでひろげ得れば幸せと思います。

豆秋さんは川柳の一茶といわれた人、すでにその作品はこの文章のはじめに引かしていただきましたが、私の私淑している先輩の一人です。珍らしく句でない句、散文川柳が例の「川柳雑誌」二一五号にみつかりましたので、ここに御紹介いたします。

小石

須崎 豆秋

一列がつづく。一人殖え二人殖えしてつづく。うしろの人が前の人へ問いかけてました。「これはいったい何んだんネ」、「さあわても何だか知りまへんけど、まさか注射とは違ふやろ思もて列らべさせてもてまんネ。」

某神社々前の机の上に置いてある印刷物をお御随意にお持ち帰り下さい」と書いてあるのでお詣りをした人々が一枚づつ取って行きました。風に吹きとばされないやうに印刷物へ載せてあった小石が三つ四つ残っただけでやがてこの印刷物は一枚も無くなりました。

そこへ地方出の団体が参りまして「御随意にお持ち帰り下さい」の立札と小石とをしばら

く見比べて居りましたが、たちまちにしてこの土のついた小石は、三、四人のトランクへしまい込まれてしまいました。

国へ帰ったらこの小石はうやうやしく神棚へ祀り上げられ、お燈明を供へられることでしょう。

豆秋さんはこの文に句はつけておられませんが、句をつくる以上に、この文の中に句想をもちこんでいられます。いわば句作のメモですが、大分川柳の姿を見失いそうなところまで話がはずみましたので一寸ブレーキをかけてみる気になったのでした。江戸小唄のようだといえはそうもいえましよう。いささか近代味に乏しいともいえるかもしれませんが人間というものを掘りあげたときそこにみつかる人間の本来の姿、それをこなすのが川柳の川柳たるものであるでしょう。しかも、近代喜劇の父ともいうべきモリエールの喜劇に通じるものがないわけでもありません。あほらしいことをそうとは気付かずにしているのが人間ということもかとも思えますから。

路郎先生といわれる「いのちある句」とはこんなところにしっかり根をおろせといっているのかもしれない。先生の作句ぶりをうかがったことがあります、一句のため一年の推敲すら惜しまれなかったとおっしゃっていました。

先生は上に枝を繁らせるだけでなく、繁った枝を支える根を考えていられました。

先生の句に

恋の翼あの眼だるうか眼だるうか

というのがありますが、これは恋愛の一瞬間の描写とは思われません。そのバックには大ロマンが展開され得ます。

又、
行末はどうあらうとも火の如し
名をすてて十七八の恋もせん

この二句はどちら一句をとっても、一句で倉田百三氏の「処女の死」の一篇に全く相当すると思います。

誰もがよく存知している

俺に似よ 俺に似るなと子进行

や

妻や待たん靴音を高めんか

などは近頃よくつくられるサラリーマン、あるいは小市民を扱ったどんな作品より立派だとは思いませんか。

これもドグマといわれるかもしれません。

私は川柳の近代性をのべて、近代文学に横すべりさすように誤られてはと第二回のはじめに定義を出して、それをもとに話をすすめてきたのでした。

ここまで述べて来て、亡き麻生路郎先生に今まで気づかなかった偉大さを感じはじめました。先生との距りがわかりはじめたように思います。先生の死はただ一人の人間の死ではありませんでした。どうしたら先生の遺髪がつげようかと張切っているのは私ひとりではありません。

人生批判、社会批判を通して各々の人間陶冶という一本道がついています。

絵の大作から筆を起してここまで来てしま

いました。川柳の現段階、限界らしいものも一応考えてみました。将来への方向も暗示したつもりです。明日の飛躍を夢に抱きながら努力をつみ重ねましょう。それこそ先生に酬いる道でありましょう。

その時こそ世界の諷刺詩川柳が世界の文学川柳と生れかわる時です。

○ この私言発表の動機は清水白柳さんの御紹介で関西学院大学川柳部の若い方々にお目にかかったことでした。

執筆にあたって、無断引用させていただいた諸先生の玉稿に謝するとともに、いろいろ御助力をいただいた同人、大谷学園の同僚に御礼を申し上げます。

おまわりさんの句集

「執務百態」

山田季賛

昨年12月6日付の、毎日新聞朝刊で「川柳に託す30年余の警官生活」という自費出版（松原署次長の小寺さん）の記事を見た。

早速公衆電話でお話をうかがったら「新聞に掲載されたが、まだ見本が教冊出来上って来た程度だから全部出来上ってくれば、お送りしましょう」とのことだった。再び、12月12日付、サンケイ新聞朝刊で、

林のような夜を警ら

小寺松原署次長の「川柳句集を自費出版」

という見出しで小寺次長さんの写真と出来上がった川柳句集「おまわりさん」が「執務百態」に掲載された。

これは、どうしても手にしなければと、また電話をしたが、あいにくの不在でお願いすることが出来なかった。

年の暮れも迫る12月28日にまたまた電話をしたら、「取りに来て下さい」との返事である。官庁ご用納めの日であるから、早くにお伺いしますで電話を切った。

四時過ぎに仕事場を出て、初めての松原署をお伺いしたら、小寺次長は僕の来るのを待っておったとのこと。「まあ坐りなさい」と次長さんの回転椅子の側に僕は坐った。

句集の出版について、いろんな労苦を語られるのをただ感心しながら聞入るより手がなかった。

「さあ、どうぞ」と、一冊の句集を出され僕は代金をお支払いすると申しあげたが、いらないとおっしゃる。若い後輩諸君の教育に出版したのだからとのことである。

なかなか、奇特なお方だと感心した。帰りの電車の中で、「序言」から「発刊にあたって」ならびに「はしがき」を読み、正月の休みには一句残らず拝読したが、ここに僕の胸に打った句を二・三句記したいと思います。

コソコソと深夜の警ら月が知る

顔に似ぬやさしい声で道教え

ルールさえ守ればスイスイ車行く

制服を脱げばやさしいパパとなり
ピットリと合った指紋に恐れ入り

初歩教室

題「顔」

菊沢小松園

今月の課題の「顔」は簡単な、創り易そうに見えるのに、案外に取立てて問題にするような句も少なく残念でした。自分の顔、妻の顔、他人の顔、子供の顔、大人の顔、人間の顔、獣の顔、小鳥の顔、地蔵の顔、野仏の顔その他、顔を立てる、顔をつぶす、顔が利く等々色々な顔がある。投句された顔のあまりにも、狭いのにもやや失望した。もっと視野を広めて題意を、自由に生かすべきではなからうか。

聞き初めの顔して母は背いた
さすが親双生児の顔間違えず
美男美女とはいかぬ縁むすび
三次会もう顔のきくところなし
婚約の顔一杯に春が来る

花子 千梢 千郎 八郎 徹也

第一句、母は子供の云うそのことをすでに知っていたのであるが、世慣れた親ところが初耳のように聞いてやったと、言うのである。そこに人間味と教智を見る。第二句、親の愛情の眼は他人に見分けの附きかねる双生児の顔を見違はしないと云うのであるがただそれだけで、やや浅い。第三句、思うよ

うにはならぬ世の中、唄の文句のようにはいかず、美男美女とは、程遠いと言うのであるが真実は外観の美しさだけでも判じられぬそこに、この夫婦の救われる路がある、面白い見つけどころ。第四句、二次会までは誰かが顔が利いて飲み歩いたが、三次会になるともう顔が利かず帰らざるを得なくなったというところ。第五句、やっと婚約が成立して、身も心も春、顔一杯の春がいい句になった、佳句として推す。

福相と云われくつたくない笑顔
諦めてピエロの顔で世を渡る
初春へまず借金のない笑顔
あの顔で世間はひろい恋だより
告別式近所へ義理の顔を出し

瑞枝 千代 初直 正也 亜也

第一句、無難というだけの句、説明が親切に過ぎて、句を軽くした。第二句、歎きのピエロ、映画を一句に纏めたよう、達者な自嘲の句。第三句、句境は軽いが、目出度い正月らしい句、さすがに老練さが見える。第四句人好きずき、捨てる人、捨てる人、だから世の中は面白い、恋は顔だけで決まるものではない

らしい。第五句、この人、都会人へ冷たいメスを入れ、その一面を剔出して見せて呉れた併しこの句境はこれ以上の深迫いは危険。

どの面をさけてにほかに顔がなし
美己代 どの客の顔もきかせるバーマダム 寿美司
破天 顔色を見ながら過す気のつかれ
二代会へ顔だけ出してそつと消え 一 白江
県人会出世の順に顔ならべ

第一句、句材の面白さに引かれる、上五の鬼面人を驚かす式の大上段な構え方もこの場合、人を喰った面白さがある。第二句、マダムの商売上手を一句にしただけで、やや底が浅い、いつも達者な句を見せられるこの人にして本月は低調。第三句、一寸引つ掛る句ながら、上五の云い切つて終ったかたちでは余情がない、もつと具象の事実を現わす方が句がはつきりする。第四句、二次会の句も多かつたが、この句の座五、そつと消えが光る、その人の地位や、人格も想像されて面白い。第五句、こうしたこともあらうがやや作意が見えてわざとらしさが損。

もう顔は見えぬにハンカチ振りつづけ

芳子 芳子 芳子 芳子 芳子 芳子 芳子 芳子 芳子 芳子

晩酌のほしくない顔のぞき込み
真剣な顔で受話器ににぎりしめ 正朗
厚化粧落して母の顔になり 清泉
顔の汗テレビカメラがふかさせず 保夫
第一句、よく整った句、句材が誰も感じる処でありふれた場面を描けている、それだけ平凡と言われるだろう。第二句、この句は良い、行き届いた愛情の濃やかに引き込まれ

る、殊に座五の動作の自然さに、余情を覚える。第三句、表現された句の上の動作はよく判る。

けれど、こうした動作に移る過程の要約がないので、大げさな割に感動の空虚さは抜けないのが難。第四句、生活の為に心ならずも浮いた稼業に就いている然も手持ちの若い女、短い十七字の中にはっきりした影像が浮ぶ、厚化粧、母の顔、矛盾した二つの相反した二面を無理なく肯かせた作者の努力を言う。第五句、思いついた句のようだが、日常茶飯事と見過し勝たのことからも句が生れることを示している。

泣き止んでおもちの方へ匍う笑顔

マスクして教授は教授らしい顔
松 風
静観堂
千 尋

殴られた方はその顔知って居り
顔見せるだけでもよいと里の母
同 痴 亭

親の顔などは知らない感化院

第一句、泣いても誰も抱き上げてくれぬと知った赤ん坊、玩具の方へ匍うて行って笑顔になった観察の繊細さを頂く。第二句、マスクしていても先生は先生さを失わずと軽いタッチながら一面を突ついている。第三句、殴った方は忘れても、殴られた方は忘れ切れない被害者の心理を句の上に生かした。第四句、里の親ころがよく出ている、ほのぼのとした親の心理に触れる温かい人情味の句。第五句、これは又反対に社会の暗い反面、感化院の少年達の句、もう少し前途の明るさ位いは望まれる句を見せてほしい。

またもめて結局顔を借りに行き
人を得つ顔だ焦れている目許
孤児院へ今日も偽善が顔を見せ
神様が作った顔へ手を入れる
顔ばかり言うてた人の妻かいな
若い人にまかせますと顔を俯せ

第一句、またもめてと時間的な経過を句の上に現わされたことがよい、前にもその以前にも採めたことがこの短かい省略の上に生きている。結局顔を借りに行くということの、伏線として立派に役立っている、句はこのようにありたい。佳句。第二句、観察の細かさを取る、句材は些細なところにもあるというよい例句。第三句、偽善でも悪いことよりもよいと云った人があったが、作者の潔癖さがそれを咎めたのだろう。第四句、隆鼻術や整形術が一部に流行している時代をこの句は怒っている、神への冒瀆というのだろう。第五句、理想と現実の違いにメスを当てている、句の上の軽さとうらはらにこの句の指すところは深い。第六句、戦後派の若者達へ押えの利かなくなつた大人達の、哀感、剔り取られた、時代の断層と云つたようなものまで窺える。

こみ上げる笑顔初めて父となり
手術後をたしかに歩く顔の牙え
顔の利くバーは場末の露路の裏
顔見せに偶には来いと電話され
ママゴトにママそっくりの顔になり
失意の日妻の笑顔に支えられ
屋台店いつもの顔は宵のうち

同 比呂路
同 利 美
同 同
同 紫
同 香 芳
以上句はこのままで判り安い句ばかり、

第二句のたしかに歩くがよく利いています、第五句、なかなか面白いところを掴んでいる、引出した句に原句と違ふところがあつたらこうした方が何等かの意味でよいと思つたので手を加えたので、参考にして下さい。

旧作 目鏡をこし借すとも借さぬとも言わず
反省を促す顔をにらみすえ
選者吟
四十二年三月二十日締切五月号発表

題「鍵」(かぎ)

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号

菊沢小松園



ヨクヨ
便箋



良心

良心が今日のしきいを高くする
良心に恥じて日記へ書くまこと
嚙り泣きまだ良心を持ち合はせ
良心に目かかしをして義理を欠き
良心のかたまり地位も金もなし
良心をネオンの渦がはね飛ばし
良心の呵責良心残つてた
良心がついてゆけない儲け口
良心があるから逮捕の顔かかし
良心に背いてストの列に
下心あって良心じやまになり
良心の扉ゆるすじる寺の鐘
良心がとがめ一人二人へり
良心が選挙くさいから返す
良心が踵の向きを変えさせる
良心の尺度がちがう子ともめる
良心のうずき屋台のコップ酒
良心に聞けと冷めた口突つねる
良心に問う間がなかつたこと
母さんの涙良心よみがえり
良心に聞けよと釘を打っておき
そやけどそやけど良心せめながら
良心がないのか汚職わるびれず

愛古千美藤晃春木千同靜孝弘齊初形章可醉芳曉笛無
鳩方翁子波男己魚代 水華朗花甫水雅住夢仙明生聖

良心と別に打算で告白し 十九平
良心に恥じない今日の汗を拭き 鎮也
良心のうずくま寝返りをせず 愁
悪友へ僕の良心承知せず 替
良心がちらりとどきドジをふみ 素身郎
良心がおへそのあたりで痛みだし 美己代
覆水は返えらず良心ムシヨで覚め 恵二郎
唇を盗んで良心疑われ 七面山
良心に聞けと畳を蹴つて立つ どんたく
麻薬打つ度良心の量が減り 七面山
佳
良心が三面記事ヘギョツとなり 金三
良心を仏にあずけて嘘を云い 多蘭子
良心の麻痺潤滑油の聖書 秋月
顔パスにも良心があり席譲る 八九寸
良心の呵責睡眠薬さかず 十九平
人
とぼれとる賽銭やはり箱に投げ 百酒
地
良心の涙疊に吸いこまれ 芳仙
天
良心に恥じない頑固押し通し 曉風

メンバー

福田丁路選

類をもつて話題豊富な類を呼び
メンバーはみんな幸せそうな顔
メンバーになれぬ子供と居る
メンバーと知らずおしやべつと
メンバーの一人が嫁して気があ
メンバーが描い芽出度い初詣
メンバーは女僕男性ききおろし
新メンバーころりと会社案をのみ
メンバーを変えて再建整備案
ペテランが一人欠けてるまま出
メンバーになれぬ同士で馬が合
メンバーにおつちめが居て楽し
メンバーが描いも揃って金メダ
メンバーの擬装見抜いて図に当
メンバーの重点的というに洩れ
もう一人欲い歌留多へ祖母を呼
陳情のメンメンバー一人いつか消
儲けてるかにメンメンバーは
ラーメンだきメンメンバー食い盛
遠慮なくメンメンバー新居へ押し
メンメンバーの話題はいつも嫁の愚痴
親泣かせばかりでメンメンバー編成し
座が乱れかけてるメンメンバー消え
揃っているなどメンメンバーひやか
メンメンバーとして苦も顔合う心
メンメンバーにかつて雪の山を降り
メンメンバーの上座を孫の数で決め
メンメンバーが一人欠け出ぬムード
メンメンバーで残り解消した派閥
メンメンバーはいずれ劣らぬ古狸

八九
勝子
みやこ
文子
瑞枝
愛鳩
酔夢
宗太郎
古平
十九
弘朗
美恵子
藤波
千久良
千翁
素身郎
齊花
三幸
二九三
芳子
同
千夏
静水
舞子
紫
隆子
恵二朗
明子
いさ夢
利美

名前だけメンバー顔はまだ見せず
メンバー 七面山

メンバーにブレキ役が一人おり
推薦が要るメンバーで権威めき
メンバーらし雀も行動共にする
メンバーが皆ライバルで援け合い
そのことにふれずメンバーから

人 露声
メンバーに加わる野心見透され
健太郎

地 明子
メンバーの長所生かすリーダー
しょうむい意地メンバー一人欠け
軸 古方

メンバーの善意へ悪意ある批判
古方

空 港

黒川紫香選

哀愁を帯びて空港のマイク鳴り
欠航と決る空港を風が切り
空港の見送りあつけなく飛び
空港を万才で発つ時の人
大物が着くか空港のカメラ陣
空港を立てば機長にたよりきり
空港へ家の子郎党引きつれて

無聖
笛生
勝子
代仕男
百酒
双楽
軒太楼

お別れをする空港に一人佇つ
空港の第一声を待つマイク
消息がまだなく空港黄昏れる
降り立つて僚機の遭難知らされる
空港で花東派手に陽がそそぎ
修学旅行で羽田見てかえり
羽田まで送って帰る妓の素顔
空港に来てやっとなどを固め
空港で外人派手なキスをする
空港は昔のままで四発機
河豚殿が航空便で御安着
空港のもう外国へ来たような
空港の横凸凹の道をゆく
鯨雲を発ち花東が邪魔に成り
空港でふる手も板について来る
欠航と言う空港の吹き流し
延着の空港きつ雨になり
国負うて立つ気空港のメッセジ
台風が来る空港の広々し
空港の朝を爆音撒き散らし
タラップを降りて今来た空を見る
空港はもうすぐベルト締め直し
空港で確かめて見る成田山
巻く巻く風空港の芥湯を巻き
空港へ売れっ子タレントかけつ
反対をした空港へ出す店舗
着陸をして出迎がはつとする
空港の霧広々として深し
佳 七面山
つれづれに空港ロビーへ来る若さ
古方

文子
金三
十九平
誓二
松風
愛鳩
秀峰
亜童
奇童
宗太郎
不水
美恵子
清泉
章雅
千久良
卯之助
形水
征也
鎮也
佳女
秋月
正朗
古心
惠朗
露声
いさ夢
七面山
古方

空港へ行くに交通マヒに会い
空港を飛び越えて行く不気味さよ
空港の間借りするまへりコブター
見送りの序に空港みて廻り
空港の握手は誰としたのやら
乗りなれた羽田男の無表情
着陸をして空港は広いとこ
軸 曉明
天 芳仙
地 利美
人 信二

品質優良

タチカワペン先



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

十五周年記念大会

春は大萬川柳から

— 梅咲く里に秀句が匂う

「春は大萬川柳から」というタイトルをまつけた。ことそれほどこの語句がびつたりなのだ。

昭和四十二年二月十二日(日)、ここにどう四十四氏。この中には生駒から激励にかけつけてくださった葎乃先生、遠来岡山からの十九平、恵二朗両氏など、正にけんらの顔ぶれである。

司会はこの道の「家元」西尾榮氏、「家門のほまれ」とかで最後の懇親宴までつとめられた。

開会の辞は、近く流布される若本多久志副理事長。川柳の登竜門である大萬川柳をたえて花々しく幕をあげられる。

麻生葎乃先生が「みなさんのお顔を見たさに」と、わざわざ激励にこられたが、先生の元氣なお顔をみてわれわれもうれしかった。

祝辞にたれた中島生々庵主幹は、大萬川柳の「川柳塔」へおけるバックアップは大きいと、白柳氏や梅里氏にその労をねぎらわれたのである。

松江梅里副理事長は、故豆秋さんのアイディアで今日の大萬川柳にまで伸びてきた経過を語られ、故路郎先生のおかげであると恩師を

しのばれる。路郎先生のなきあと、一時は解散するはずだったが、支援者の声が大ききついに清水白柳氏を動かすことになったことなど感慨ぶかけに挨拶のことばとされた。トッパツターは山川阿茶さんである。

席題がおわると、十五年連続投句の服部十九平、北川春巢両氏に、賞状と記念品が生々庵氏の手から授与された。両氏とも本社の参事である。

三賞は殊勲賞に笠原吸江、敢闘賞に遠山可住、技能賞に城一舟の三氏にも、賞状と記念品がおくられた。

ベスト10氏は大萬憲法により選をすることになっているが、この人達にも賞状と記念品が清水白柳選者から授与された。

いわゆる中入後から兼題五題の披露となった、二横綱、二大関、一関脇の出場となる。席・兼題の三才には記念品が贈られ大会気分は最高調に達した。

席題「おてんば」もろてからおてんば養子によく仕え
同「仲裁」 金井 文秋選
仲裁の機嫌ほどには納まらず 小松園

同「知らん顔」 傍島 静馬選
友情は見て見ぬふりもしてくる 柳志

同「ベテラン」 川村 好郎選
ベテランを敬遠してから座が和み 十九平

同「栄転」 笠原 吸江選
滞りなく義理をはたして栄転す 榮

兼題「長生き」 本多 柳志選
持つものを持つと長生きしたくなり 梅里

同「女連れ」 内藤さ子選
女連れと見くりり不足したビール 藤波

同「苦勞人」 吉岡 美房選
苦勞人とほけた味も持ち合わせ 恵二朗

同「タリミナル」 正本 好客選
タリミナル優勝も一度氣勢上げ 梅里選

同「奇蹟」 松江 藤波選
奇蹟から人生観をかえて生き 波

(スベースの関係で天位だけ発表)
本年度第一回「長靴」は清水白柳氏によつて発表され、四点的の薫風、利美、三点半の幽

谷、三点の麴光、二点の梅里、可住、木魚、弘生、十悟、芳子諸氏がベスト10である。

大萬川柳名人会

ベストテン招待懇親宴は、栄光の十氏を囲んで飲めや歌えの宴になる。

隠し芸の天位は柳宏子氏の「安来節・どじよう揃い」である。珍にして妙、正に庄巻である。地位は春果氏の「船頭小唄・ゴム奥

い」と好郎氏の「忘れもの・???」。人位は十九平氏と葉子さんのダンス、鉄児氏の玄治店「佳作に阿茶、梅里氏の名調「都々逸」

をはじめ、生々庵、静馬、文秋、きさ子、小松園、柳志、水客、榮諸氏がそれぞれ名人芸を披露された。(三才は拍手の数による) 八

時にめでたく打ち上げとなる。(不二田一三夫記)

大 萬 川 柳

「長靴」

入選発表

選者 清水白柳
入選 八百六句
入選 六十一句

笠岡山文
長靴におじて三毛のあとずさり
篠山宏子
ゴム長でボソボソ夜水引きにくる
西宮玩柳
朝市の股火へ長靴湯気が立ち
大阪漣
下駄箱の中で長靴巾をとり
大洲 暁明
兄ちゃんの長靴で来て走れない
岸和田 操子
長靴も揃ろえ入学待つばかり
大阪 恒明
楽天家らしい長靴の減り工合
宝塚 野菜
長靴を屋根に飯場の日曜日
仙台 光道
清掃係を命ずと長靴支給され
大阪 薫風
むずかる子長靴小気味よく飛ばし
羽曳野 比呂路
長靴もあげ底だったタイプの菓子

大阪喜仙
長靴に蜘蛛の巣張って転業す
高槻 季賛
長靴で来てよかったと雪をほめ
新居浜 凡生
負け惜しみ長靴はいて虹をほめ
姫路 芙己代
長靴を脱いだ若さで土を捏ね
下関 不水
ゴム靴の子へ雪解けを言いふくめ
広島 露声
ぬかるみへ来て長靴の背を借りる
宝塚 無聖
長靴を脱いで板前らしい下駄
芦屋 たつみ
出稼ぎがゴム長で来る早い冬
呉 魁光
ゴム長で来てデパートは気がとがめ
大阪 双楽
釣り堀りへゴム長そろえ胡座かき
岡山 藤波
長靴の雪が飛び込む縄のれん

東京泰造
長靴で乗るタクシーの頭割り
岡山 一声
長靴が歩巾をあわす蛇の目傘
堺 亜也
長靴のカーチャンが居て店が持て
倉敷 素身郎
陳情へ長靴のまま坐り込み
大阪 保夫
長靴を履くと気さくにものが言え
大阪 明子
長靴で水ひききらぬ穂を起し
米子 千代
長靴を敬遠したか席を立ち
笠岡 忠三
長靴を履いて洋傘おき忘れ
笠岡 遠二
葬列へ長靴しんがり尾いてゆき
大阪 琴女
長靴で来て下駄箱にちと困り
島根 代仕男
ゴム長で焚火踏み消す始業ベル
大阪 形水
ストープへ長靴脱いだ足を出し
大阪 弓彦
長靴もたんで仕舞う家に住み
大阪 阿茶
長靴の女将市場で顔が売れ
岸和田 きさ子
晴れて来たデート長靴もあまし
岡山 幽谷

三月の句会

玉造川柳会

時 十日(金)午後六時
題 勇ましい・枯木・塩
所 玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

堺川柳会

時 十二日(日)午後一時
題 発展・素顔・胸算
所 堺市九間町山ノ口筋
(阪堺線神明町電停下車)
八木摩太郎居

南海電鉄川柳会

時 十六日(木)
題 手荷物・出直し・超過
所 ナンバ高架下
新和クラブ

南大阪川柳会

時 二十日(月)午後六時
題 設計図・満足・打診・甘える
所 アベノ区松崎町三ノ一〇
大 万

長靴で来て一と息きに飲んで去に
長靴をよごして測量無事にすみ
米子 瑞枝
長靴の母大学の子に貢ぎ

男装の長靴が歌う宝塚

島根芳子

長靴へすくったメダカ駆けてくる
短靴でくればよかったから暗れ

奈良十悟

小道具の長靴土の香を知らず
下足札「ヘイ」ゴム長と念を押し

大阪弘生

長靴に朝刊仕入れから戻る
障子洗うママ長靴で武装する

和歌山木魚

長靴も遊びつかれた音となり
長靴の入荷を有線くにかえし

篠山可住

長靴のちんばで妻の洗いのもの
添いとげた恋へ長靴苦にならず

大阪梅里

長靴を脱いで始発へあぐらかき
遺志継いでゆく長靴へ子を抱え

五客

長靴で来た玄関の騒がしき
鳥取法泉水

妻の手を借りて長靴やっとなき
岡山幽谷

長靴のてれこに気づく小火が消え
篠山与志

長靴がちとてれくさい夜勤明け
布施清人

ゴム長を社へもおいとくぜロ地帯
大阪柳志

人ノ句

長靴をそろえて雨の日を起さず
奥 甕光

地ノ句

長靴の片方どうしてもこける
大阪 薫風

天ノ句

長靴でママも手伝う溝掃除
尼崎 利美

選者吟

やみ市の時代がうずく半長靴

昭和四十二年第一回

大萬川柳ベストテン

(二月現在)

一 蕨 風

二 利 美

三 幽 谷

四 甕 光

五 梅 里

六 可 住

七 木 魚

八 十 悟

九 芳 枝

一〇 瑞 志

一一 柳 志

一二 清 人

一三 与 志

一四 法 子

一五 崎 子

一六 崎 子

一七 崎 子

一八 弓 彦

一九 形 水

二〇 代 男

二一 兼 題

兼題「底ひさし」五句以内

昭和四十二年第三回

締切

発表

三月二十五日

四月二十日

投句先

大阪市阿倍野区松崎町三

ノ一〇

大萬川柳会

宿題

各題2句

名刺

青年

雲

灯

喝

出句は出席者に限る。当日出句。

二題、当日午前9時会場で発表。

各題2句。選者、佐藤正敏・清水白

柳。宿、席題とも10時30分締切。

質問歓迎。講師、河野春三、柴田午

朗、堀口塊入。司会、北川純一郎

金五百円。昼食を含む。

兼題入選句集および記念品贈呈。

大会終了後開催。懇親会費、金千円

(予約制)

平安川柳社創立十周年記念

明治百年全国川柳大会

日時 昭和42年6月4日(日曜) 午前9時~午後5時

会場 京都市左京区宝池 国立京都国際会館

宿泊

京都観賞

懇親宴

大会費

討論会

席題

宿題

各題2句

名刺

青年

雲

灯

喝

出句は出席者に限る。当日出句。

二題、当日午前9時会場で発表。

各題2句。選者、佐藤正敏・清水白

柳。宿、席題とも10時30分締切。

質問歓迎。講師、河野春三、柴田午

朗、堀口塊入。司会、北川純一郎

金五百円。昼食を含む。

兼題入選句集および記念品贈呈。

大会終了後開催。懇親会費、金千円

(予約制)

大会の前日(6月3日(土曜))

午後1時京都駅前出発(貸し切りバ

ス)参加費五百円(予約制)

旅館幹旋ご希望のかたに一泊二食つ

き金貳千五百円。

柳 界 展 望

あちからこちから
お便りを待っています。

(橘高薫風・担当)

▼時の川柳十周年記念事業の内容が次のように発表された。(一)時川基金の設立(二)論説原稿募集、テーマ「川柳の向上と発展策」原稿用紙(二十字詰)十枚・十五枚、締切四月末日、賞金は特選一篇一万円、佳作二千元、審査員楳元紋太、鈴木九葉、三条東洋樹(二)特別誌上句会、課題「心」「働く」各三句、原稿紙半截大の用紙に住所氏名を明記のこと。投句料百円同封。四月末日締切、賞金、特選一句一万円、準特選二句各二千元。選者は東洋樹、茶六、風柳、清造、萬葉、風来子、主税諸氏。順位決定法は本社で清記の上、無記名で各選者に回す。宛先神戸市兵庫区神田町四〇時の川柳十周年記念事業係。詳細は同社へ。

▼第十二回ふあうすと全国川柳作家合同句集参加要項は自選十句を住所氏名雅号所属柳社を原稿紙に明記の上大阪市東区南新町二の二四橋本言也宛。参加費三百円、特集号予価三百円。▼平安川柳社の明治百年全国川柳大会は六月四日国立京都国際会館で開催されるが、前日の京都観賞は御所内苑、二条陣屋(国宝)島原角屋、仇野念仏寺など一般観光コースでは行けない充実した所だから、三日午後一時東都駅前出発の観光も大会同様大いに期待されている。参加費五百円(予約制)。

▼川柳ジャーナル二月号は自選作品特集号として発行七十氏の六十六年度の収獲が掲載されている。▼川柳オーソック(北見川柳社)十二月号は、昭和四十四年度北海道柳壇展望を載せ、道柳壇の概況、結社の動き、道内柳人の分布、道外柳人及び交流、道内川柳団体などかいつまんでよく分るよう書かれてあるのので部外者にも興味があり、一年の回顧は各地で必要だと思わされた。

▼蟹の目川柳社の第十九回自画像賞は古田勝一郎氏が受賞。「つなぐ手の小さなぬくみ唄いだす」など七句が対称。▼竹原川柳会の昭和四十四年度の成績発表で学生の義田浄美君に竹原川柳会賞権を授与された。森井善居、三宅不朽、戸塚無門、熊谷操子の諸氏が表彰された。▼麻生霞乃先生は一月十五日、明和研究会のすゝむ、舟遊、夢虹、薫風らが奈良市の若い彦彦、胡人両君を誘い合せての年賀を受けられ、同席の魚住満潮氏と句延を開き、久しぶりの作句を楽しまれた。

▼阿部佐保蘭氏(東京都)の著書「川柳と翻訳」出版記念句会は一月十五日北海道拓銀楼上で、盛大に開かれたが、中国公使、瞿荆洲氏、明大教授松尾弘博士ら名士も参列祝福された。▼一杯水川柳会(下関市)新春句会は一月二十二日鉄道職員会館で。▼備前川柳社(岡山県)新春句会は一月十日横山一声居で。▼成人式川柳句会兼和気川柳会新年句会(岡山県)は一月十五日和気町役場で開催。▼月刊「クシベ」(宇部市の新聞)一月号に五平太川柳社が、「川柳を通じて明るい社会を」「明正選挙を川柳で呼びかけ」「川柳と共に善意の花を」などと、その活躍ぶりを紹介された。

▼池田可宵氏(長崎市)は一月十六日から東京の三越本店で「川柳のれん展」を開かれた。大阪高島屋では三月七日から十二日まで開催される。



たのしさひろがるお買物

阪急

大阪梅田本店・神戸支店・東京大井店・数寄屋橋店

▼山田季賛氏（高槻市）は一月二十二日、小学校の同窓会のメンバー二十四名と伊勢参拝旅行を持ち、内宮前二光堂で楽しく会食された。「同窓会百姓も先生も社長も居り」

では一月二十一日から二十三日までの三日間、春の染織名人展を大阪南区の随園で、また、逸品会春の新作展を二月十一日・十二日の両日、羽衣の新東洋で開催された。

▼河本南牛史氏（松山市）は、「昨年は立派な句碑をお椿社に建てて戴いたが、今年は二三の友人と川柳行脚して四国巡りをし、その句集をと」夢見ておられる。そして今年こそ近作柳樽で巻頭を得たいと思っておられる。

▼辻川喜仙氏（大阪市）から「目の手術後、何もかも思うにまかせません。何分年ですから致し方なしと思っています」と。「見えずとも口だけ達者と耳に入り

▼阿部佐保蘭氏（東京都）は一月九日長崎へ。港の見える矢太楼で、可宵氏と湯滝にあたりながら、水府、路郎両先生の思い出話などをし、駅前長崎荘での歓迎宴に臨まれた。

▼羽原静歩氏（守口市）の令兄克巳氏（元天主閣同人）は大阪府煤煙防止協会、大阪府汽缶士協会の各会長の要職にあったが、一月十三日肝臓病のため死去、行年六十八才。謹悼。

▼住吉貞康氏（会津若松市）は一月十日脳出血のため急逝、大信院念養康安居士、行年八十一。謹悼。

▼大木ふる児氏（松江市）は永らく市の要職を歴任されてきたが、松江市企業局長を最後に十二月三十一日をもって勇退された。

・新同人紹介・

長谷川

紫光

鉄児・生々庵推薦

▼西辻竹青氏（奈良県）からのおたよりによれば昨年ご母堂が八十七歳の高齢で逝去されたとのことであ

る。謹悼。

▼水谷竹荘氏（大阪市）二月本社句会の選者となっていたが、ちょうど南九州一周の旅行中で帰阪のまに合わず、宮崎から申わけないとお詫びの旅信があった。

▼福永清造氏（京都市）令夫人しずえさん（54）が一月二十五日〇時四十五分逝去。謹悼。

▼若柳潮花氏（高槻市）は四回目の目の手術をするため二月二日に北摂病院に入院された。ご本人は至極のんびり川柳塔の投句もされているが、川柳関係や日舞関係の人たちをあわてさせた。ご全快の日を祈ります。

▼渡辺伊津志氏（愛媛県）は二月六日に大阪へ入港、ちょうどその日は本社の二月句会であり、生々庵主幹と電話で声の対面をされ、主幹が句会へ誘われたが土地不案内のため欠席。

▼永松東岸氏（岡山県旧不朽洞会員で備前前支部長）は一月十二日逝去。葬儀には備前川柳社同人が出席された。一面影は句箋に挑む君なりし。久米雄。

▼家沢清花氏（明石市）は川柳カムバック第一号に梅志氏の秀句鑑賞、大萬川柳の天位、一路集日満氏選に天位とよるこびが重なり大いに気をよくされている。

▼永松道雄氏（熊本県）は田中美喜子未亡人中心の句会で川柳塔同人の芳仙氏や英子さんに会われた由。

▼藤井明朗氏（島根県）2月20日来阪、本社と南大阪川柳会へ。水客氏宅一泊。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

▲タケタ薬品

アリナミンA

詠

元旦紙まるで名刺の見本刷り
さり気ない風に値札を盗み見る
他所の味貶して母を喜ばせ

近

初夢がよかった宝くじを買い
孫が来て爪を切ってる日向ぼ
ゆき遅れ長靴はいて働き手

和歌山市 秋月宏方

漢字の間違い

藤原秋月

われわれが日常、使う漢字には似たような字がいくつもあり、よく間違ふ。数年まえにある病院で患者が、薬袋に書いてある自分の名前の「己」は、正しくは「巳」であると、看護婦に云ったところ看護婦達は、おかしくなことを言う人だと言つて笑つていた。その看護婦らは、己巳巳の似た字が三字あることを知らなかったのである。自分の無知を棚にあげて、人を笑つていたのを見て私は、おか

しくなった。薬袋の名前の一字が違つていても、薬は、その人の処方であれば別に文句を言うことは無いと言われるかも知れないが、自分の名前を誤つて書かれるよりも、正しく書いてもらいたいのには当然のことだろう。ある小さな川柳会へ投句した私の作品で「親戚」と漢字で書いていたら、その川柳社の謄写印刷の句報(川柳人の印刷したもの)では「親籍」と直してあった。古い辞書と新しい辞書を調べても「親戚」の字を用いてある。私は正しく親戚と書いていたのに、わざわざ間違つた字に変えてあった。原句の漢字が間違つているのを正しい字に直すのは、よいとしても、正しく書いてあるのを、違う漢字に変えるのは作者を馬鹿にしたものだと思う。活字の誤植なら我慢も出来ようが、またその人は「旧制中学の出身」で、われわれ無学の者をよく指導してくれる人で

川柳自選句集

吉備団子 (十七集)

定価 三〇〇円
送料 一二円

大森風来子氏の序文にあるように十七年も続いた句集はたしかに日本の柳界に見あたらないうであらう。作家の職業や年令や住所もあり、ゼヒあなたの書架に一冊を。

発行所 岡山市内田三〇三

川柳岡山社

あるだけに「親戚」が正しいことは十分、知つて人だが。また、ある句報(「活字」)で、他人の句だが「締ける」と印刷してあり句の前後から判断しても意味がわからなかった。すると翌月号で訂正してあり「締ける」は、正しくは「締める」としてあった。それで前月号をまた読んでみたが「締ける」にしても「締める」にしても意味がわからないが、私は「締める」ではないかと思つた。だが作者に聞いてみようと思つて、はがきを出した。その作者からは折り返して返事が届き、原句は「締める」だと知らせてくれた。句報には「締める」翌月号の訂正記事では「締める」と、わざわざ直していたが、その訂正記事までが間違つていた。次号で先月号の訂正記事の訂正があるかと思つてしたが、それは無かつた。

辻関さは訂正記事にある誤植

秋月

本社二月句会

会場 自安寺
六日 午後六時

二月の句会は出足がわるいおもったが、暖冬型のおかげで、ストーブを消すほどの盛況だったことは、なによりもありがたかった。

「せんば」の御大、宣介主幹をはじめ「あうす」との言也氏、常連天樹氏それに千葉氏ほか他社のおレキレキが友情出席され、会場は明かるいムードがいっぱいである。

毎月のことだが、与呂志さんが一番乗りで準備万端ひとりで行ってくれる。こういう裏方さんがあってこそ楽しい句会がひらけるのである。

白柳氏の柳話は、各地の大会のガイドといつたぐあいに、他社の宣伝までつとめ、愛される「川柳塔」の姿をハッキリ見せられた。生々庵主幹から「関西短詩文学連盟」の復活の経過報告があり、作品展へ出品する規定などを語られたが、開催日までに本誌へ広告の出来なかつたことは残念である。

席、兼題の選者も豪華版で、またそれだけに活気あふれ、呼名も活発だった。お目あての月間賞は海士天樹氏の秀句に輝いた。このもの云わぬカップこそ秀句の短評になっているのである。九時二十分閉会。(河井庸佑)

整理)

出席—与呂志・一栄・双楽・良夫・一三夫・多平・静歩・静馬・滋雀・照一・水京・加仙・痴亭・美己代・旅風・言也・千葉・句楽坊・有子・柳志・一舟・生々庵・みよ・弓彦・鉄児・花梢・富久・一鳥・多蘭子・梅志・白柳・頂留子・奈良子・好郎・文秋・白溪子・たつみ・薫風・清人・吸江・葛城・いさむ・警二・柳宏子・形水・一扇・宣介・久志・梅里・季賛・天樹・宏子・舟遊・凡九郎・野迷路・すゝむ・トメ子・勝暗・恒明・一人・知恵・千梢・金三・幸雄・柳太・葉子

後藤梅志選

席題「ジリ貧」
ジリ貧を見こして新教さそいにき
ジリ貧へ焦せるタバコのおわれき
ジリ貧へいっそ口下手輪をかける
子沢山ジリ貧と云う怪かじり
お手当で社のジリ貧を知る二号
ジリ貧となつて会社の茶が変わり
ジリ貧へ小田原会議まだつづき
ジリ貧へ隣が家を買いくる
ジリ貧と見せぬ大阪どこん性
ジリ貧の思い切る日のついに来ず
ジリ貧となつて頭をたいたにみ
根性をきめてジリ貧あせらない
ジリ貧をしても二号は離れず
ジリ貧の市電老兵は消えるのみ
ジリ貧のあせり酒の量がふえ
麻雀のジリ貧量またこがし
ジリ貧へ女房の知恵も借りてみる
ジリ貧をどうしようもき邸に住み

たつみ 弓彦 恒明 金江 吸江 好郎 静馬 鳥蘭 静馬 舟遊 金三 痴亭 恒明 好郎 多志 形水

第七回

短詩文学作品展

主催 関西短詩文学連盟
後援 大阪市教育委員会

会期 三月十四日(火) から
十九日(日) まで

会場 大阪市立中央図書館
三階講堂

(西区北堀江御池通五一・市電・市バス・あみだ池下車)

ジリ貧をはらはら見てる第三者
ジリ貧にまだいていさいかまう母
ジリ貧へご隠居さまの知恵を借り
ジリ貧になると夢まで小さくなり
ジリ貧に慌てたくない明治つ子
ジリ貧へはちばち家手放なされ
ジリ貧はまだよい方とらやまれ
ジリ貧と別に縁談は進められ
ジリ貧に父祖伝来が又も減り
ジリ貧にそろそろ知った塩の味
ジリ貧になつて夫婦の気が揃い
横丁へ間口も狭うなる老舗
ジリ貧の社長と見えぬバツカード
ジリ貧の株へ素人あわて出し
ジリ貧に旧い友達尋ねて見
ジリ貧のまま中風が出てしまひ
ジリ貧へ独身気楽な事を言ひ
スキヤンダルからジリ貧とる人気

言也 花梢 一三夫 文秋 旅風 白溪子 一舟 滋雀 柳宏子 蕉風 旅風 奈良子 勝暗 清人 鳥莊 多志 たつみ 清人

ジリ貧をがみがみ言うは女房なり
 ジリ貧が弱音を吐かぬ子沢山
 返品の山へ倉庫の灯がわびし
 ジリ貧へ顔の皺までふえてくる
 やけそになれぬジリ貧を待ち
 ジリ貧となつて会議が続きだし
 控え目にしてはジリ貧腹を立て

席題「變裝」

橋本言也選

覆面の男とだけで決めてなし
変装を解けばカッブル嫌な人
変装は面だけでよい朗らかな
脱出記その変装の苦心談
専門語で聞かれる変装汗をふき
変装も口ひげまでは変えられず
変装で誰れ知るまいと手を握り
変装のつもりは髭が重んでいる
カッとしたとたん変装忘れとり
運のつきデカの変装見破れず
変装の方がいかしたガドマン
変装の刑事も逮捕されて乗り
変装をしてもスターのもつムード
地下足袋でデカドヤ街へまゐり込み
変装をする日の髭を選っている
変装と知らずに組めば僕の妻
変装を妻だけはもう知っており
二等車の隅で変装目が光り
つけひめの変装孫を笑わせる
付け人も汗をかいてる早変わり
サンガラス掛けてもフアン知らない
女中部屋借りて変装出来上り
ナッパ服着ている方が刑事なり

鳥莊榮一 靜榮志多 天樹志吸 梅選 誓二 鐵柳 白一 頂三 鳥莊 良夫 宣介 柳宏子 文秋 照太 奈良子 清風人 薰榮 水京 柳樹 滋雀 舟遊 梅志 好郎

変装は記者良心に恥じている
変装はまず女房に見てもらい
ヒョットコで踊る自分をふと忘れ
ポン引のミス変装を見破れず
自信満々変装鏡からはなれ

岡
言
「方
席題

落ちぶれて聞く方言のあたたか味
方言の若い教師にある人気
里帰り子は方言をもう覚え
方言がふえてトンネル郷里へ抜け
方言で話して旅のつれになり
弁論に熱がはいれば河内弁
方言を使いこなした粋な人
方言も少し土産に旅帰り
方言も混ぜて商談まとめ上げ
方言で来た商談へ気を許し
小商いで商いすれば客が寄り
方言でよいものを売り
地の言葉二、三おぼえてしたし
方言で判っているが聞いて見る
方言チヨッピリまるインタビュー
テレビ見る祖母方言をなつかしみ
方言も真似て司会者親しまれ
尋卒で名をなし方言光って来
同郷の解説もしてパスガール
温泉に浸る方言楽し農閑期
故郷の言葉のサギに引つかかり
方言を丸出しにして口げんか
山小屋の方言明日を信じとり

席題一方

岡橋宣介 選

宣舟梅滋美言介選
志遊雀房也
梅人里清江遊
吸遊
舟たつ亭
痴三享
金秋
文贊
季柳
トメ子
宏白柳
烏莊
奈良子
与呂志
柳榮志
一千一
天一
鳥莊
静歩

方言で問えば標準語で答え
方言を丸だしにしてや老い
おつたら未だ方言の出る若さ
雑路の中で方言ふりむかせ
方言の嘘美しく旅便り

兼題「有料」 西田

初運転有料道路でこわくなり
向いロハこちらは有料配達区
有料の方が混み合う休けい所
外野席有料になる大試合
観光地ここにも料金表を出し
有料になって子供の客が減り
有料の席なるほどという景色
有料の道路が早いと運転手
ゆつくりも出来ず有料トイレ出る
外野開放有料席は屋根があり
有料の道路も矢張り事故があり
有料を惜んでマヒに巻き込まれ
有料の古寺へ若さはすどおりし
驟き逃げへ有料道路の灯が明かい
母乗せた時は有料道路にし
パトカーが有料道路つつ走り

梅梢里 花房 美樹 天介 宣介 芳子 東雲樓 正朗 阿茶 淑子 たつみ 天樹 双葉 梅里 一三夫 千葉 鉄児 たつみ 勝晴 一栄 与呂志

直原玉青著

創元社出版

「新しい南画と
俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

有料の席へ徹夜の列が伸び
有料にしたら駐車をしてくれず
有料にしたいコッソリ置くくる
有料と角に書いてる 試写案内
有料を待たして招待から通し
大都会ゴミを捨てるに金が入り
有料トイレ狐の襟巻きした女
空入れれば十円ばったくりに
有料にせねば賽銭もあげず去に
矢印を付けて拝観料を取り
済んでから有料だったのに気付
駐車違反たった百円出し惜み
ここからは有料ですと言うガイド
有料の庭へ団体あつけないし
有料にしたら客足ぐつとふえ
拝観料皆別々に金が必要
有料のここだけ補修行き届き
有料のここからバスの揺れがやみ
有料と聞いて出した手引込める
小銭みな使いはたした遊園地
有料へ当り散らした汚しう

兼題「ベン」

橋高薫風選

ボールペン差して末っ子胸をはり
社長室のペンは昨日の位置のまま
始末書へ巡査えらそうペンを貸し
齢はたちペンを執るよう逢に行く
ペンフレンド写真送ればそれつ
ものぐさへペンと葉書をおしつ
なつかしく又読み返すペンのくせ
ごまかしたとき税吏のペンをとり
ペンだこが消えてもママになる

幸雄 一舟 梅志 白溪子 花梢 梅志 葛城 一舟 千葉 与呂志 鉄児 柳太 静歩 野迷路 文秋 幸雄 梅志 誓二 良夫 柳宏子 正朗 淑子 芳子 八郎 恒明 花梢 頂留子 一舟 扇

ペン書きで邪魔くさな買状来る
手続きがうるゝ役所のちびたベン
セコハンで便りをよこす母
齢六十ペン習字など習い初め
細書きのペンを好んで律義者
ベンかえてかも情緒をたぐり出す
区役所に新しいペン置いてあり
ペンひとつ持てば珠玉の旅日記
ペン滑るごとし日記にあるのち
安物のペン店員のそつけないし
才能がないなとベンダコも思い
訥弁と思えぬベンのおざやかさ
ベンにまで母子の愛は生きている
ペン書の履歴書どこか頼りなし
ペンのあと嘘も誠も同じ色
毒舌家と世に知るベンネーム
答案紙ベン字で書いてゆく自信
八十の母の便りもベンになり
いつまでも売れないベンにうめれる
魔物のペンで男のように書き
ペン書きで母の匂いがもの足らず
ペン書きがこんなに難な老詩人
パーカーでオブジェのよる領収書
愚かなるものよインキの切れな
ベンだこでキッチリ止まる琴の爪
一本のペンと化すとき丹羽文雄

兼題「女」

福島鉄児選

赤電話女うれしい時を持ち
ぬくいなと思う女のとへ掛け
同権へ女だてらとも言えず
娘三人ひっそり夫テレビ見る

梅里 清彦 弓彦 多志 吸江 梅志 誓二 静歩 幸雄 恒明 好郎 一人 一茶 阿茶 琴女 清人 千夏 勝晴 一扇 生々庵 静馬 生々庵 幸雄 蕉風 白溪子 梅志 文秋 与呂志

白衣脱ぎ乙女心を取戻す
女社長へ秘書秘書なりに気を配り
女同士いつしか過去へ泣いてる
ラッシュアワー女も男の顔になり
通夜の席というに女見栄があり
発言を女系家族に押えられ
女湯のなにがやがやと騒々し
女同士気炎あけつてのお好み屋
恋捨てた女はきつて嘘をつき
女にもあつた男に見せぬ意地
ワンピース十九の春を意識する
ホステスと妻という座の使いわけ
花嫁の荷物へ女値踏みする
酔えはすぐ女の身許聞きたがり
腹割ってにるかに女話好き
かあちゃん銀婚式からより強く

誓二 季賛 芳子 清泉 生々庵 白溪子 一三夫 白溪子 白溪子 静歩 良夫 幸雄 柳宏子 天樹 良夫 阿茶

茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場



茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON

心齋橋大丸・そごう東入る
TEL 271-6684

又別な女を作る 三面鏡
女らしさと戻して旅の妻
勝気でも女は女恋に泣く
紫に女の過去を秘めて生き
女ついでやーネと女同士に会話
家を出たたんざーマス調になり
恩給を持って嫁ぐの恋もなく
きつぷよい女は仕事握ってる
時折は肩もまされる女秘書
がらくたをすっぱり捨て切った女
土壇場が来れば女は泣いて勝ち
紅一点隅で小さくなるばかり
刺戟求めて女の過去に触れ
子を産んでからの女の交りよう
古きずをかくす女の地味好み
気乗りせぬ見合いも女紅を引き
気にさわることだけ女言うて去に
口喧嘩だけは負けない女の子
すねている訳を女は背に言わせ
着飾った女おんなを値踏みする
女独り噂通りの日を送り

使った人が みなほめる

川柳塔柳 篋

本誌と同じサイズです

一冊 六五円
送料 三五円

頂留守 水京 静歩 凡九郎 静馬 柳志馬 阿茶 言也 瓢太 一舟 文秋 梅里 吸江 たつみ 富久一 白柳 千葉 滋雀 静馬 幸雄

夫唱婦随古い女と言われても
身だしなみ女は古稀の薄化粧
何もかも知った女の眼が燃える
女連れ去れば潮が引くごとく
嫉妬する女も失せて女老け
花生ける女静かな恋をする
骨までもしゃぶる女と見て別れ

兼題「空白」

中島生々庵選

空白へ母は二伸で書きそえる
人間失格と思う空白の日々
空白へ何か書きたし墨をすり
空白がないほど職をかえている
空白に座し凡々の余生なり
空白を充たす化粧へ念を入れ
空白の心に雪の山がある
ふところに空白そらは雪もよい
空白の心に椿落ちた音
寄せ書きの空白へ我が名も書き
空想が醒めて空しさききあがる
別居した冷戦果てることをなく
云い勝った後の空白渦を巻き
筆勢が空白埋めてリズムカル
空白へ連子をもらって籍に入れ
云いすぎて気になる白い日記帖
賞罰なし以下空白のつづがなさ
今となつては惜しい空白
空白は悲しい角瓶出してくる
空白の調書へ拇印捺せといる
空白の人とは見えぬかえり咲き
いさかいのその空白を子がそらし

梅里 阿茶 多志 一三夫 文秋 鉄児 一 花梢 阿茶 恒明 幸雄 舟遊 梅志 花梢 葛城 芙代 鉄児 旅風 加仙 柳志 恒明 白柳 静歩 琴女 吸江

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (06) 三四五二一四
夜間 (06) 四四〇八

いろいろあらあな空白もまた楽し
空白のなさくたびれる週刊誌
私生児は空白と捺す父の欄
空白へ右にならえの寄付をする
空白のない程便箋恋をする
人生にも空白がありそれでよし
アリバイの空白突如黙秘権
止り木で今日の空白噛みしめる
空白へ妻はかわらぬお茶をいれ
人生の空白ですと無為徒食
空白という日もあつてお茶の味

★

▼ハワイ・ウイロー社二月旬会は、廿二日の
ワシントン記念日として夫妻で渡布された若本
多久氏の歓迎會としてカネオへのあき坊氏
宅で開催された。なお次号あたりに多久志氏
の渡米記事がある予定。

冬地柳

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

王造川柳会 (大阪府)

西出一栄報

窓外へはしゃぐ子の靴ママ平気
居眠りが本を落して笑い出し
別れ惜んでドアに指をはさまれる
桃割れの方へよろけた満員車
学生帽かぶれば大学生だった
寒い夜を詩吟で帰る夜学生
学生に賛成をする妻若し
ノート持ってるので学生かと思ひ
地下街の朝はゴミ取る音で明け
地下街の方が明るて手が組めず
宝くじ売る地下街の隅の風
地下街の迷路で酔いがさめかかり
陽を恋うることも忘る地下に売る
肩抱いて泣くなど母の手が温い
総理にでもなつたつもりで抱負
ギャンブルに負つ抱負が反古と
丁稚から社長の抱負持ちつつけ
兄弟の抱負は父母をホッとさせ
子の志望親の抱負を狂わせる
今年の抱負を記者が追いまわし

文章照井宏恒
秋雅一平芳明
六童子
古方
梅里
白柳
柳舟
静馬
季賛
千葉
野菜
柳志
小松園
珠笑
一栄

盛売りを残し魚屋仕舞いかけ
魚屋の夜は寿司屋になる市場
慰安旅行二泊三日の雨が降り
慰めを待ってたよに涙が出
納弁でも親身の慰め身にしてみる
同情のあつてこの手がこわくなり
慰める思案もつかぬペンをとり
七転びまだ慰める妻があり
素人の芸も役立つ慰問団
慰めに行き貰い泣きして帰り
南大阪川柳会
金井文秋報

盛売りを残し魚屋仕舞いかけ
魚屋の夜は寿司屋になる市場
慰安旅行二泊三日の雨が降り
慰めを待ってたよに涙が出
納弁でも親身の慰め身にしてみる
同情のあつてこの手がこわくなり
慰める思案もつかぬペンをとり
七転びまだ慰める妻があり
素人の芸も役立つ慰問団
慰めに行き貰い泣きして帰り
南大阪川柳会
金井文秋報

出来ばえのしないお顔へひまがり
面接がすんで舌出す控え室
妻宅へ電話しといて雲がくれ
金一封で軽くさばいた控え室
控え室で余裕を持たず胸をなで
控え室ライバル肚をさぐり合い
人事課のニュースを聞いた控え室
証人に来てパネの出た椅子で待ち
鶯が鷹生んだと変な褒め言葉
ごますりしながら盃洗へあけて立ち
見すごしに出来た部下が立ち上り
出来ばえを皮肉り腹では舌を巻き
我鬼大将の部下の一人にうちの孫
控室へ届く弁士の弥次郎の孫
俺に楯衝く部下の居て頼母しく
ご指名へパフを叩いた控え室
部下思い身保証も引き受ける
冬眠がさめ北国からの花便り
ウイロー社句会 (ハワイ)
問答無用と胸ぐらへ太い腕
敏腕な男敬遠されて生き
これ腕にお前も叙勲が欲しかろう
片腕を首相に遣つて幹事長
振り上げた腕のやり場へ女の目
腕まくり粋な姐さん痰叩きり
庖丁の腕も良妻型に研え
腕相撲ほどよく孫に負けてやり
鍍金でも父の形見の腕時計
腕節たいてみせる逞しさ
十年も若かったら腕をなで
スタンドを総立ちさせた凄い腕

出来ばえのしないお顔へひまがり
面接がすんで舌出す控え室
妻宅へ電話しといて雲がくれ
金一封で軽くさばいた控え室
控え室で余裕を持たず胸をなで
控え室ライバル肚をさぐり合い
人事課のニュースを聞いた控え室
証人に来てパネの出た椅子で待ち
鶯が鷹生んだと変な褒め言葉
ごますりしながら盃洗へあけて立ち
見すごしに出来た部下が立ち上り
出来ばえを皮肉り腹では舌を巻き
我鬼大将の部下の一人にうちの孫
控室へ届く弁士の弥次郎の孫
俺に楯衝く部下の居て頼母しく
ご指名へパフを叩いた控え室
部下思い身保証も引き受ける
冬眠がさめ北国からの花便り
ウイロー社句会 (ハワイ)
問答無用と胸ぐらへ太い腕
敏腕な男敬遠されて生き
これ腕にお前も叙勲が欲しかろう
片腕を首相に遣つて幹事長
振り上げた腕のやり場へ女の目
腕まくり粋な姐さん痰叩きり
庖丁の腕も良妻型に研え
腕相撲ほどよく孫に負けてやり
鍍金でも父の形見の腕時計
腕節たいてみせる逞しさ
十年も若かったら腕をなで
スタンドを総立ちさせた凄い腕

引退へ見る我が腕の細いこと
瘠腕へ母子五人がぶら下り
さめ果てた恋の名残りが二の腕に
片腕を国に捧げて物を乞ひ
手腕より凡庸として生きんかな
老夫婦色気離れた腕を組み

備前川柳社

横山一声報

無粋者の父にもあった隠し芸
コチコチの課長の芸におどかさ
チャンス今来とっておきの芸
隠し芸もう一杯を飲んで立ち
隠し芸出して上座に連れ込まれ
隠し芸出して男の格をあげ
酒席の隠し芸は下手でよし
隠し芸十八番を他人がやり
隠し芸赤いたすきを借せと云う
隠し芸ないのは隅で手を叩き
座ぶとんを抱いて踊った隠し芸
女性いてはばかる隠し芸を持ち
ぎょうさんに賞めた社長の隠し芸
新妻をはらはらさせた隠し芸
とっくりも一役買った隠し芸
隠し芸もう出す頃とはやし立て
エプロンのまま隠し芸に引き出
二次会でする隠し芸別に持ち
隠し芸あんまり酔っていて違い

むらくも川柳会

(島根県)

藤井明朗報

曉舟 紅茶 カロ女 魔花麗 快夢起 泉水 横山一声報 水仙 一声 飴ん坊 文平 幸仙 初美 伊久野 秋月 浄美 胡風 宗江 良義 柳風子 英子 柳子 正洲 久米雄 芳子 礎山 佳女

戦死した父に見せたい嫁姿
花嫁の夢をえがいて運ぶ針
人生の岐路花嫁の歩は重い
上機嫌両手に花の写真撮り
上機嫌笑顔たっぷり顔芸し
突破した帳尻パッの上機嫌
花嫁にびったり合った貸衣装
花嫁の笑顔こぼれる名司会
起されて消えた初夢惜しい夢
初夢が初荷の声に起される
初夢を見てからあどけないえくぼ
語るに惜しい初夢だったとニヤリ
高知川柳社(高知市) 川竹松風報
良妻と浄机うれしい三カ日
酒たばこ断つ友増えて秋さむし
日本の味を包むは竹の皮
娘の微笑それだけでよし新春の膳
笑つては済まされませぬ十二月
クタビレタ服ハンガリーの型でたれ
十二月スピード違反もしとうなり
たこつばを揃った過去も今日の幸
転落の詩集過去の夢さびし
過去ののみを語る男の落ちた肩
過去ののこ言うて隠居がゆずら
過去の罪指紋と共に署に残り
過去を追う養老院の灯が暗い
本当のくらしを綴る子の日記
元旦の日記へ一句添えて書き
知られたら困る暗号の旅日記
幸せな頃の日記の字がうすれ
手の甲を叩いて女すつと立ち

鶏生 一郎 正郎 孝華 敏明 祥月 明朗 英子 鎮也 征也 白汀 一人 紅雨 竹莊 寛雨 白雨 未遂 松風 勝芳 香幸 運骨 外城 古子 蟠蛇 柳洋 吞水 文子 伊津志

明日のなぞ今日の幸せ放すまい
大鉄川柳会(大阪市) 辻白溪子報
モノレール静かに地球が動きだし
実行へ真一文字に口を閉じ
計画のずれ実行がともなわず
不言実行糊は行ていた壁の跡
PRのネオン綺麗に川へ落ち
マスコミをまず抱き込んでPR
商魂はあの手この手のPR
宿酔い調子に乗った夜を悔い
吉を引き茶柱立った日の温み
縁談がととのうとあり信じたし
頬よせて二人みくじへ仕合せに
おみくじへ粉な雪が舞うて止み
ドスの効く声で示談屋がからみ
モーニングで乗るタクシーは高う
遠慮した声で病室見舞われる
あすなる川柳会(大阪市) 梅里報
さよならも言えない空に虹がいる
餞別を取りに来たよなさようなら
さよならをするまで寸惜しいぞ
肩のこる話は止めて酒を出し
弱点も長所も知って惚れ直し
黒い霧晴れそうでなく今年暮れ
さよならへ思わせ振りを握り
うつむけば翡翠は青き愁いもつ
つまみ喰い誰の出す手もおなじ
結論が出ぬまま脱線した会議
道楽が本職になれる菊作
肩書きが多く本職つかみかね

天樹 たつみ 宗悟 季賛 一高 白溪子 求女 美穂 一求 坦水 立夏 水夏 永断 紅月 和笛 素郎 弓彦 百彦 双楽 好郎 梅里 素郎 恵美子 福郎 弓彦 百彦 双楽

歩るけば車乗れば人間邪魔になり
結局は損本職へまともど
スキヤキへベルトゆるる食べ盛り

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

どん底に生きて回顧の悔いもなく
不景気な年やつたなと晦日の湯
戦争の裏すっぱぬく回顧録
一生を母寝不足で押し通し
残り福あてて市場がドット湧き
気がつくとペンがひたいにも回顧
出来るな日にも帰りたい胸うつく
墓碑の苦おとして先祖回顧する
回顧すれば子供に叱言云えぬはず
チャンネルを廻して回顧茶の間
わが回顧歌に託して妻と詠む
寝不足を子が引きまわす三カ日
寝不足へ水をかぶった心意氣
麻雀の寝不足だけは苦にならず
古財布一度は蹴って拾い上げ
初恋に財布はたたいた頃思
願りみてまだまだ足らぬことば
寝不足も苦にならぬ程ようはやり

どんぐり川柳会 (羽曳野市)

ゆきを
好 郎
梅 里
弥 生
集 一
吸 江
痴 亭
双 案
雄 峯
芙 己
喜 風
努 長
一 人
岳 太
雪 男
比 呂
泉 吉
梅 里
好 郎
幽 玄
重 夫
圭 太
マサエ
鬼 遊
茶 坊
聖 二
万 里

嫁ぐ日の用意は出来て尚不安
用意ドン親が乗り出す体育祭
受入れの用意出来たに客は来ず
飛入りに用意の賞品持ち去られ
用意して待った台風小さすぎ
お見合日用意する茶も手がふるえ
不意の客昼餉の用意妻ともめ
一人分用意したのに双児出来
肩かたのすみにきれいな頭文字
鳥籠の寒さへつがい肩をよせ
クリスマス静かに降る雪の音
下駄の音母の達者がよくわかり
木枯しの師走に響くキネの音
エレキーの音にしびれる現代ッ子
櫓の音も軽く釣りと糸を垂れ
眠れぬ夜FMリズムの音に酔い
大都会サイレンの音も手守唄
足音を聞いて新妻迎えに出
流の音二人の言葉通じない
肩のこる話に欠伸かみ殺し
不用意の祝辞には流暢すぎ
まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

借金を値切って払う十二月
筆蹟の癖も似てきて惚れている
貧乏ゆすり課長になって止まず
縮くくり済んで年越そばの味
くせもみな許して女ついでゆき
足くせで自分の靴をよく見分け
カレンダー十二月のしみをつけ
黒い霧晴れそうでなし十二月
岸和田川柳会
高橋操子報

凡 々
人 々
浅 子
敏 夫
和 子
み 子
比 呂
小 百
一 彦
史 好
兼 州
於 千
秋 水
都 子
の 子
与 一
宇 宙
太 人
岳 人
い わ
梅 里
好 郎
泉 睦
立 太
飄 兒
扇 里
美 幸
星 斗
茂 児
好 郎

そよ風が祭囃子を乗せてくる
寡婦ひととちわの風と添寝する
台風一過孫達去に
借金風風の通らぬ部屋で待ち
激怒した心静める手を握り
再会の友へ夏の夜短か過ぎ
風鈴も不快指数にさからえず
エチケットフランスではと言
ブラブラと歩いて見たたい土手
職安でブラブラ同士が説く政治
ブラブラと歩けばピラが掌に残り
川柳世面多留 (小野田市)

ふぐ提灯いそがしそうに泳いでる
母ばかり忙しそうに歳暮の暮
忙しい忙しいのが立話
忘年会忙しい中にあるゆとり
賛美歌が静かに洩れるクリスマス
出稼の父も戻ってくる聖夜
パチンコ屋今日ジンゲルベルで呼
鍵ッ子が今日は甘えるクリスマス
年越しのそばで今年を喰べ終り
良き時代だった蕎麦屋の出前持
運そばに去年はあった母の顔
母の味妻が受けつぐ手打そば
金があるときだけ子どもかはら
旅のある日ボストの前で書くは
無事元氣知らせる葉書大き過ぎ
こまごまと空き間をつめて母便り
おしのびの旅館がくれた年賀状
寄せ書も絵葉書が来たハネムーン

白 子
一 骨
美 恵
き 子
武 助
か 子
春 栄
好 郎
操 子
加 仙
た け
花 仙
つ 子
九 平
新 雪
千 保
利 生
純 昌
涼 水
明 道
素 幸
幸 子
い 空
さ 空
つ 子
衛 次
吞 海
羊 歳

かゝみ川柳社 (岡山県)

池田古心報

元旦の誓いも今は夢になり

丸山

明朗川柳会 (大阪市)

田中多幸報

芳登

追求をしている方も神でなし
今日平

少年の夢をそだてる宇宙の画
憧れの都会で夢はくずれゆき

大山

気の染まぬ予算話に座を外し
予算案分捕り主義で議会もめ

一幸

追求へ逃がれる嘘も底をつき
追求の結果仲間到我が子も居

夢よりも先ず食うための職となり
傷つけて傷つけられて目が覚めた

常夢

残業々々これで予算にこぎつける
花嫁は予算の足らず里で立て

多幸

警戒にゆがんだ心がふるえてる
午前〇時巡査の歩く靴の音

音のない夢がつづいていて目覚め
富柳会 (富田林市) 阿部柳太報

白柳

予算立てて空の旅路の夢を見る
ねずみにも予算があるが昼寝する

繁子

お見合の実感母にだけ話し
幸福の実感孫とたわむれる

辞表出して日本晴の空仰ぐ
辞職届出した帰りのコップ酒

青米

予算立ててやった仕事が又手形
ご予算にお合わせします百貨店

一休

作柄の見通し思う程になし
見通しがついて事業の手を上げ

急行を止めて大臣辞職する
隠すだけ隠した末に情事ばれ

静庵

一応は予算内でも値切るくせ
家具新調に行つて予算を立て直し

富水

貧乏を障子穴から見通され
見通しをみくじにたくす気の迷い

犬の日にもう隠されぬ帯を巻き
前身をかくすに家政婦よく動き

紅月

良い予算取って粗末な橋をかけ
二次会の予算スポンサーあてに

久川

家出した母を追憶持ち焦れ
追憶の糸をたぐれば涙湧き

七難をかくすに家茶も花も要り
犯人は証拠の品に口を割り

金三

いきのよい魚とどんどん売れてゆき
魚つり父ちゃん一匹つれただけ

源生

経帷子着て追憶の中の人
追憶を語る日母の瞳が若し

柳志

冷たさも感ぜず泳ぐ池の鯉
兄ちゃんが帰つて来たた鯛を買

茶坊

蛙浪

言ひ訳の出来ぬ処へついた紅
敷かれてる証拠子供綴り方

好郎

山内静水報

久子

暖冬でストーブすっかり忘れられ
ストーブの守りするだけの夜警番

生きて居る新芽が土を割る
本物に見せる正札つけたまま

吉太郎

以上小・中学生

清子

すすめられすなおに受り謝す善意
寒空に善意が積る社会鍋

喰うだけでやっとな言ふことおき
栄養をおしつてくれる子はソッポ

六電

知つていくくせに気持ちを聞きた
気持よい挨拶私の方がてれ

洋子

折角の善意マスコミキザにする
目の前に立てば座席を代るのに

食いつめた人生膝を抱いてねる
悪かったとまだあやまず飯を食う

静馬

熱帯魚みつめて好きとまだ言えず
白魚の如きと願う羊年

日夫

夢多く一つ一つが実行だ
バチンコも夢ではいつも敗れいず

初夢は高くでつかい山登り
昨夜の夢物語りが現実になり

花梢

反すうをして羊の夢は春
青春を開く鍵あり美しさ

浩

長々と電話で旅の夢話す

税金を見事に食つてお役人

柳太

柳

柳

小園

孝勝

白柳

柳

柳

酒のない膳が届いてお元日
一つがな五十二を生て初硯
紅一点私も金費払います
進学の息子に私も負けられず
三カ日名残り惜んで舞う吹雪
ソロバンが合せて慌てた請求書
仕事する人もありけり三カ日
乳をやる時のワイフがマリヤめき
まだ見えぬはずの瞳にみつめられ
除夜の鐘私も旅で聞く一人
初出勤去年の顔と変りなし
手ごたえのあった魚の小さいさ
ハッスルをしよう母子の当り年
銀婚を羊の妻と迎う新春
末ッ子が一番先にオメデトウ
門松に止る雀の眼がきれい
どこからか琴がきこえる春の街
来てくれた父がてれてる参観日
諦めもあって近頃素直なり
気持だけくめと饒別にぎらせる
柏手の音のびえたり初詣で
人間の哀れ星座は手をつなぎ
母さんは大好き茶碗に盛つてくれ
お目出度う年玉もらうつもりで来
心まで清めてくれた今朝の雪
母の手がますます荒る三カ日
ささやかな暮し魚屋に借りがなし
ふじかけ短詩睦会（鳥取市）
母の胸たたいてケーキ買わせる気
好きな兄ギョーザ食う時だけは嫌
お駄賃を先にもらってお手伝い

鬼焼 二三枝
菊 醉
操 子
松 風
扇 水
一 路
菩 居
そのみ
不 動
子 仙
静 火
房 子
静 水
清 水
紫苑莊
無 門
寛 水
吞 竜
茶 女
政 己
俊 健
澄 恵
ナリム
不 朽
峰 泉
磯 報
二 民
朗 子

焼パンで胸が焼けるも母が言う
口でなら男の子にも勝って来る
好きで好きで好きで好きなお下
春が好き夏秋のお好き冬も好き
口笛は止めとくわが家の灯が見え
三味線に合わない唄で父機嫌
通信簿上った口笛帰って来
好きな父居るの何んにもいい
イスがない母ちゃんひざにすわ
ものを書く静かな姉の顔が好き
飛び込んで安心父の胸の中
鼻唄で働く兄ちゃんとても好き
父母居ます幸せじつくり噛み締
以上小・中学生
アルバムの一番可愛い児が僕さ
詩ばかり書いても人に好かれ
出張の日かずだけ買う週刊紙
色々の思ひ出秘める桐小箱
好きな人呼ぶのはやさしい方
高校は出たが予備校足を止め
仲間入りした十代が恐ろしい
健康で倅せ四季がみんな好き
空箱に未練も捨てて大掃除
弟の自信が見える通信簿
週刊誌友としている独り旅
革カバン弁当週刊誌だけに提げ
好きな人架空の人で間に合せ
好きな人ないので架空の名を創り
好きだった人淡々と語る祖父
好きな人に似る雲少しづつ笑い
好きな人来て居て味を憶えてず

敬 子
き ち
敏 彦
ブッコ
武 志
富 子
ノリ子
コッコ
カッチン
保 夫
梅 野
和 宏
昭 好
明 人
久 子
政 男
長 子
総 司
広 嗣
泰 子
多 鶴
一 代
吉 春
勇 枝
和 子
英 子
秀 雄
鎮 也
克 秋

登校する子等の歓声雪の朝
充分に山頂の空気只で吸う
黒い霧はらいのけたい有権者
好きだった姉にわかれを供えやる
すき焼へ父がおらない惜しい味
大山の魅力をも母が不安がり
不器用は私に似てるでけりがつき
初荷今着いてバンドを締めなおし

川柳塔常任理事会

二月四日本社階上で常任理事会が開かれ、
諸物価の高騰にこのままでは健全財政がとれ
ずいろいろ協議検討をした。あくまでも同人
制を確立するために理事長以下真剣そのもの
だった。生々庵、多久志、静馬、好郎、文秋
柳宏子、梅里、すゝむ、白柳諸氏出席。

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 023 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 023 9184

・九 輪 水 煙・

発行以来はじめて
わすかではあるが部
数をふやせたことは
同人諸氏のお力添え
のたまものである。
だが諸物価の値上が
りのほうが足が早い
ので息苦しい。誌代
を値上げせずになん
とか切りぬけようと苦心し
ているのが現状である。

(清水白柳)

・ 2 D K ・

★ことしほど各地で記念大
会の多いことはめづらし
い。各社とも大会がすむま
ではたいへんなことだろう
とおもふ。ご苦労さまです
★「一路集」「青葉」の選
者末村千容氏が健康上選を
辞退されたので、川岡霊眼
子氏にお願いした。

★同人特集は例年よう
に女流作家にご登壇お
いた。日ごろ作句しておられ
る方に重点をおいたが、女
流作家の特集はいつも好評
である。

★「柳都」の二月号で、大
野風柳氏がウチの「ゆーも

あ特集」へ「これが果して
現代のユーモアに属するか
どうか。川柳作家で紫綬褒
章受賞のよろこびを分か合
っているとき、このような
作品を解説つきで発表して
いる常識を、私は疑いた
い」と書いていた。書く人
の自由とはいえ、えらいも
のとむすばれ、たいへんな
ことになったものである。
もともとこの企画は勉強の
一段階として、それを自選
とあれば、年月をかけるよ
りテがないようである。三
行の解説つきは、雑

詠らんなどと混同を
さけるためのもので
あり、また文を書く
勉強にもなるという
ネライを兼ねている
のだ。百人近い同人
が参加しているの
で、どれもこれも秀句と
いうのはむずかしい
が、きさ子、形水、
みおの諸氏の句は
ほめてあずかっている
ので、43年度の同
特集にはいい作品を
発表していただく

い。
★よそさんの柳誌を見てい
ると、いいところだけより目
にうつらない。なかでも
金を使った「一番傘」さんの
表紙にはネタミさを感じる
のだ。映画雑誌を編集して
いたころは表紙で勝負をし
ただけに、表紙には人一倍
関心をもつようである。
☆放送の仕事が忙しくなり
そうだが、本だけはいいも
のをこしらえない。
(不二田一三夫)

本社三月句会

日時 三月六日(月)午後六時
会場 自安寺(妙見さん)

市電千日前下車スグ北側

(電話211・1478番)

兼題	柳	話
「人形」	松	江
「無欲」	辻	白
「ハガキ」	金	井
「血管」	小	川
	恒	明
	若	本
	多	久
	志	選
席題	三題(題と選者は当日発表)	各題三句
会費	百五十円	

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話 大阪 043985番

4月の兼題

「光線」
「地位」

「コンクール」
「洗う」

GOLDEN
O.S.K
の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー

シルクの輝き ソフトな風合い



絹のような綿

JCC

グラボウ
セタコット

★ シャツ ★

倉敷紡績株式会社

Setacot
綿100% セタコット

★このラベルが目シルシです

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定價 百二十円（送料六円）
半年分 七百五十円（送料三十円）
一年分 千四百四十円（送料六十円）
昭和四十二年二月二十五日印刷
昭和四十二年二月一日発行

発行人 中島蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
大陽印刷株式会社
大阪市南区阿倍野二丁目一番地

発行所 川柳塔社
電話大阪・二七二一・二九八五番
郵政印便大阪・三三三六八番

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句） 中島生々庵選

近作柳樽（10句） 北川春果選

課題吟（各題5句以内）

「冒険」 仲どんたく選

「古葉」 川國鐵眼子選

「シヨツク」 森田啓人選

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句） 中島生々庵選

近作柳樽（10句） 北川春果選

課題吟（各題5句以内）

「信号」 岡田宗太郎選

「観察」 太森銀句楽選

「童顔」 新國同天子選

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



高島屋
大阪・東京・京都
なんば・日守町

南紀の旅は なんば から



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに (毎日) 12時45分発

急行 南紀3号 (毎日) 16時38分発

急行 臨時しらはま (土曜) 13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号 (毎日) 7時45分発

夜行直通列車 (毎日) 22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社
(641)8686 (341)5033

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー